

E. H. Erikson の自我同一性 (Ego Identity) についての一考察

佐藤 興一

- | | |
|--------------------------------------|---------------------------------|
| 1. 序 | 6. 青年期の自我同一性確立の諸相 |
| 2. E. H. Erikson の経歴と青年期研究における位置について | 7. 青年期以降の各発達段階における自我同一性確立の諸相 |
| 3. E. H. Erikson の自我同一性概念の特徴について | 8. 結語 |
| 4. E. H. Erikson の発達段階表について | (参考資料) D. ラベポートによるエリクソン理論の紹介の要約 |
| 5. 青年期以前の各発達段階における自我同一性確立の諸相 | |

1. 序

「アイデンティティ」(identity) という言葉が最近巷間に流布し、多種多様の用い方がなされている。このことは、「アイデンティティ」が、個人の内的問題や、教育的社会的問題の諸現象を理解するうえでかなり有用な

概念であることを物語っているものと思われる。「アイデンティティ」に独特の意味を与えたエリクソン (E. H. Erikson 1902~) の主要な著書の大
 半が、既に日本でその版権が取得され、邦訳も次々と世に出ているとい
 うこともその一端を示しているといえるかもしれない。しかしながら、いわば流
 行的に頻繁に用いられるに至った「アイデンティティ」や「モラトリアム」
 (moratorium) などの用語が、本来どのような文脈の中で論じられ、意味
 付けられているのかということになると、問題はそれほど簡単なものではな
 い。その理由としてあげられることは、エリクソンがフロイト (S. Freud)
 の極めて忠実で正統な後継者であり、エリクソン心理学理解のためには、自
 我心理学 (ego psychology) の系譜についての十分な理解が必要であるこ
 とと、エリクソンの理論が、豊富な症例観察と綿密な伝記的分析によって構
 築されていて、総合においてはエリクソンの非常な直観力と洞察力によって
 展開されているためである。^(注1) そのうえ、エリクソンは、アイデンティティの
 概念を必ずしも定式化しているわけではないようで、エリクソン自身、アイ
 デンティティという言葉^(注2) を定式化することは、アイデンティティの持つ非常
 に生き生きしたニュアンスを失なわせるであろうという意味のことを書いて
 いる。例えば、『アイデンティティ—青年と危機』 (Identity—Youth and
 Crisis 1968) の序文で、エリクソンは、「アイデンティティという概念に
 ついて定義的説明 (definitive explanation) をするつもりはなく、定義す
 ればするほどこの言葉は不可解な何物かをさす術語となってしまうが故に、
 種々の文脈の中でその不可欠性を立証する以外にアイデンティティを探究す
 ることはできない」とのべ、他の個所でも「アイデンティティおよびアイデ
 ンティティの危機 (identity crisis) という用語は、一般的な用法として
 も、科学的な用法としても、一方では、その定義を求めることすらほとんど
 つまらなく思われるほど一般的で自明なことをともに意味し、他方では、測
 定という目的のためにはあまりにも狭く定義されたものを意味し、そのため
 それのもつ全体的な意味あい^(注3) が失なわれ、何か他の名称で呼んで良いよう
 な、そういう用語になってしまったようである。」^(注4) と記している。そこで今

回は、以上の状況を考慮しながら、主として『自我同一性』 (Identity and
 the Life Cycle 1959) に記されたエリクソンの発達分化説 (漸成説, epi-
 genetic theory)^(注5) に沿って、人間の一生涯をつうじておとずれる幾度も心理
 的社会的危機 (psychosocial crisis) を通して確立される「アイデンティ
 ティ」の特徴を整理し、発達心理学的にその意味をまとめてみた。本稿は、
 かつて著者が大学院生の当時に、発達心理学のゼミナールにおいて、エリク
 ソンについての資料を検討した際のメモを核にし、それに若干の検討を加え
 たものである。なお、自我心理学におけるフロイトとエリクソンの特徴の比
 較については、当時用いた D. ラバポート (David Rapaport 1911~1960)
 によるエリクソン紹介の文献^(注6) および H. マイヤー (Henry Maier) による
 エリクソン紹介の文献^(注7) を用いた。また、エリクソン自身の経歴と青年研究に
 おける位置については、ごく簡単に記すにとどめた。

〔注〕

- (注1) E. H. Erikson: Identity and the Life Cycle (Psychol. Issues (Monogr.)
 vol.1 No.1 1959 所収) の序文の形で書かれた D. ラバポート (David Rapaport)
 の巻頭論文「A Historical Survey of Psychoanalytic Ego Psychology」(「精神
 分析的自我心理学の歴史的展望」: E. H. Erikson, 小此木啓吾訳『自我同一
 性』誠信書房 1973, 第四部所収) は、自我心理学の歴史的発展とエリクソン
 の位置付けについての優れた論文であるとされている。
- (注2) エリクソンは、伝記的分析の執筆を数多く著わしている。『Gandhi's Truth』
 (1969) (『ガンジーの真理』) ではガンジーを、『Young Man Luther』(1958)
 (『青年ルター』) ではルターを、『The Problem of Ego Identity』(1959)
 (「自我同一性の問題」: Identity and the Life Cycle 所収) ではバーナ
 ード・ショーを、『Childhood and Society』(1950) (『幼年期と社会』) では
 ヒットラー、ゴリキーを、『The First Psychoanalyst』(1956) (『最初の精
 神分析家』) ではフロイトをそれぞれテーマとしている。
- (注3) E. H. Erikson: Identity—Youth and Crisis. W. W. Norton, 1968, p. 9 (岩
 瀬庸理訳『主体性—青年と危機』北望社 1969, p. 1)

(注4) 同書 p. 15 (邦訳 pp. 3~4)

(注5) 漸成説 (epigenetic theory)

精神分析は基本仮説として精神発達観を有するが、この精神発達観を、エリクソンは統合し、次第に展開する自我を人間の生涯、あるいは、人生の周期 (life cycle) に照らして、生物学的・社会的対人関係的・文化的過程から理解しようとした。これを漸成説、または、発達分化説 (epigenetic theory) といっている。(加藤正明他編『精神医学辞典』弘文堂 1975, p. 402 参照) なお、epi とは upon を意味し、genesis とは emergence を意味する。したがって epigenetic は、一つの項目が時間的空間的に、他の項目の上に発達することを意味するのに適切だとエリクソンはいう。(R. I. エバンス、岡堂哲雄、中園正身訳『エリクソンとの対話—アイデンティティの探究』金沢文庫 1973, p. 32)

(注6) (注1) 参照。なお、ラバポート (David Rapaport 1911~1960) は、ハンガリー生まれのアメリカの心理学者で、自我心理学の権威であり、アメリカ心理学会の臨床・異常心理学部門を創設した。臨床経験は無いが、精神分析理論の体系化と、一般心理学と社会学の理論の統合の試みで著名である。

(注7) H. W. Maier: Three theories of child development, Harper & Row 1965.

2. E. H. Erikson の経歴と青年期研究における位置について

〔経歴〕

エリクソンは、1902年フランクフルトでユダヤ系のデンマーク人の子として生まれた。父は生後すぐ死亡して、母親は再婚し、その義父の姓がホンブルガー (Homburger) という。だから、はじめはホンブルガーという姓を唱えていたが、1939年にアメリカの市民権を得てからエリクソンという姓に戻ったので、正式名はエリク・ホンブルガー・エリクソン (Erik Homburger Erikson) ということになる。エリクソンの学歴は特異なものがあり、カールスルーエのグラマスクール (公立中学校) と人文中心のギムナジウムを卒

業して以後は、はっきりした学歴はなく、一種の遍歴時代を過ごしたとエリクソン自身のべている。それは、1920年当時のヨーロッパは、能力のある若者にとって行き場のない状況だったことを意味していた。自分は芸術家に向くと考えて絵画に興味を持ち、画家を志したこともあって、1927年にはウィーンのアメリカンスクールで美術の教師をしたこともあった。このようにエリクソンの青年期の興味は多方面であり、青年期の放浪の経験がエリクソンのアイデンティティ理論の構築に結びついているだろうとも推測されている。このような放浪生活の後に、ウィーン精神分析医学研究所の精神分析家 (psychoanalyst) としての課程を終了した。(外国では psychoanalyst の資格を得るためには厳重な課程をふむことが要求されていて、本人自身もオーソライズされたアナリストによって分析されることが必須の条件になっている) この過程は約二年ぐらいたったが、エリクソンはこの期間中に児童分析について学んだ。これがエリクソンの分析経験の唯一のキャリアである。この他にエリクソンが持っている資格としては、モンテッソリースクールの教師の資格を持っている。モンテッソリースクールは幼児学校なので、一般には大したことが無いように思われているが、モンテッソリーシステムの中ではかなりしっかりした資格が要求され、一種のディプロマのようなものがある。つまり、初歩課程3年、上級課程5年の修業が必要で、その間にモンテッソリーの発達観を理解することはもちろん、特殊なモンテッソリー教具の使用法を修得してはじめてディプロマが与えられる。これがエリクソンの持つ第二の資格である。なお、この間に、ウィーン精神分析医学研究所で直接フロイトに教えられ、また自らも講師をつとめた。1933年アメリカに渡り、アメリカで精神分析と臨床の講義を持つよう依頼を受け、ボストン精神分析学研究所に2年間勤めた。1936年から1939年の間エール大学人間関係研究所で精神医学の研究をすすめる、そこでの業績が認められて、ハーバード大学医学部神経精神医学科のリサーチフェローの職を得た。この辺の事情は、アメリカの自由な学問的雰囲気、特に学歴が無い人でも実力次第で大学教授の職につくことを許すことによるわけで、エリクソンにとって、アメリカ

に渡ったことは幸せであったといえる。1936年から1939年にかけて、エール大学で社会心理学の仕事を得て人間関係研究所の所員となった。この間エール大学で講義する機会もあり、そのころから子供の遊びについての興味を持つようになった。フロイトが子供の夢に興味を持ったのと同じように、エリクソンは子供の遊びに興味を持った。それは、子供のシンボリズムの形態としての遊びに興味を持ったということである。1938年には、アメリカインディアン（ユーロク族とスー族の育児態度の比較研究はアイデンティティ論の重要な素材となっている）の調査を行なった。1939年から1944年までカリフォルニア大学の児童発達の研究に従事したが、その時の課題は、第一に「子供の遊びにおける性差の問題」だった。その内容は、子供の「開かれた空間」(open space)と、「閉じた空間」(closed space)への興味についての考察、例えば、積木遊びにおいて、男児は庭などの開かれた空間をつくるのに対して、女児は家などの閉じた空間をつくるのはなぜかということの検討だった。これにより、エリクソンは男子が生得的に開かれた空間を好むことを発見した。そして、これが男女の社会的相互交渉の形態や社会的様式の差をつくっていくとエリクソンは考えた。第二の課題は、人間のライフサイクルにおける種々の様相 (phase) の葛藤の解決様式に関する研究で、前述のアメリカインディアンの調査研究からヒントを得た。第三の課題は、子供の発達における文化人類学的調査であった。その後の経歴については、カリフォルニア大学で教鞭をとったり、カンザス州のトピーカにあるメニング精神医学校で講師をしたりしている。その間に『幼年期と社会』(Childhood and Society 1950)を書いた。この本が一度にエリクソンの名声を高めた。つまり、単なる分析家にとどまらず、知識人の第一人者としての名声を得させた。なお、『幼年期と社会』は日本でも早くから紹介されていて、1955年に日本教文社から草野栄三郎氏の訳で出ているが、新聞記者である訳者によるものため心理学書としては難点が多いとされている。(日本教文社では、この頃フロイト、ユングの選集の出版を行なった時期で、エリクソンも同時に出版したかったようである) 1951年に東部に移ったエリクソンは、ピッツ

バーグ大学やマサチューセッツ工科大学で教鞭をとることになり、1962年にハーバード大学人間発達研究学科教授となった。現在は引退の身をアメリカカリフォルニア州のティプロンに休めている。

〔青年期研究における位置〕

アイデンティティ概念は、特に青年期研究の上で欠くことの出来ない概念になってきているので、エリクソンの理論が青年期研究の中でどのように位置付けられるかを整理してみる。青年期の情緒特性である悩みや不安、それに、青年期の行動特性である反抗や断絶といった心理現象については、古くから数多くの研究がなされてきている。シュプラランガー (Eduard Spranger 1882~1963) は、この両特性には相互に緊密な関連性があるとし、青年期心性の背後にあり奥深く活動しながら姿を変えつつある人間形成の核を問題にしようとした。そこで、シュプラランガーは、自己の内界への回復と外界への出立が同時に進行する過程として、「個性化」という概念を提唱した。しかしながら、青年期の発達の意義についての理論化にまでは深化しなかった。この残されたテーマは、シュプラランガーとは理論的系譜を異にする精神分析的自我心理学の P. ブロス (Peter Blos) とエリクソンによって追究されていくことになる。『On Adolescence』(1962)の著者として青年期を鋭く分析したブロスは、青年期を第二次個性化過程 (second individuation process) として促える。その要点は、第一に、第一次個性化過程 (first individuation 第一反抗期にあたる) に比して、一層複雑な個性化の体験であり、孤独、孤立、混乱の感情を伴うこと、第二に、青年期は、自己愛的特性と現実吟味能力の喪失を伴う時期で、それが両親からの心理的独立 (parental ego support からの独立) によってもたらされること、第三に、このような傾向の固定化した一群の青年は、遷延された思春期 (prolonged adolescence) と呼ばれること、第四に、青年期の内的危機の源は、異常な自我機能に至る自我の貧困化と異性愛に向かうリビドーの働きによって引き起こされる本能的不安であること、第五に、このような内的危機に対応して、

青年期特有の安定化機構 (stabilizing mechanism) が作動すること、第六に、このような安定化機構の作動によって葛藤外の自我領域 (conflict-free ego sphere) の拡大がもたらされるにつれて、青年期後期の自我統合 (ego synthesis) の中で青年期の内的危機は克服されていくこと、そして最後に、以上のゆえに、青年期後期の自我のつまずきは深刻な精神病的症状をもたらす危機となることである。ブロスも青年期の中心問題を個性化として捉えるのであるが、シュブランガーが個性化というときに、個の主體的確立を見ているにもかかわらず、中心的役割を担っている自我の機能的側面に対する視点を欠いていたのに対して、ブロスは、青年期における性的成熟の心的領域への影響を重視する点で異っている。ブロスの第二次個性化理論は、豊富な臨床実践に立脚しているが、その理論は、社会内存在としての青年の個性化 (自己確立) の社会的意味を包括的に概念化したものではなく、むしろ、精神分析的自我心理学からの青年理解の下部構造理論としての性格を持つ。青年期を心理・社会的文脈の中で巨視的に捉え、ブロスの個性化理論と相補的關係にあって上部構造を形成しているものは、今回概説するエリクソンのアイデンティティ論である。エリクソンがアイデンティティの確立を層特異的発達課題 (phase specific developmental task) とする時期として捉え、人生周期 (life cycle) 全体を問題にしようとしたこと自体、人間の成熟を極めて巨視的に捉えようとしていることを物語っている。この点では、ワシントン大学教授 H. マイヤーがエリクソン理論を評してのべるように、フロイトが発達論において病因論を強調したのに対し、エリクソンが「正常な発達における危機 (normative crisis)」を強調していることは、エリクソンの理論がフロイトの人間観よりも人間の教育に対する積極的な提言を含んでいることを示している。エリクソンが「人格の活力は自我の統合的機能を基盤にしている」とのべるとき、その活力の諸相は、幼児期では希望、意志力、目的性、競争力、青年期では忠誠心、成人期では愛情、いつくしみ、そして最終段階では英知をさしており、この諸活力は相互に関連しながら漸成的に形成されていくものとされている。明らかにエリクソンは、

人間を健康に向かわせる潜在的成長力を認めており、その視点はホルナイ (Horney, K) らの自己実現 (self-actualization) や、マズロー (Maslow, A.H.) の成長動機 (growth motive) といった考え方に通じるものがある。コンピテンス (competence ^(注1) 成長動機) の概念の提唱で有名なハーバード大学のホワイト教授 (Robert W. White) の評価によれば、エリクソンがこの視点をもっていることは、従来のフロイディズムの功利主義的人間観を乗り越えて、精神分析を新しいレベルにまで高めたと評している。

〔注〕

(注1) ホワイト教授のコンピテンス (competence) の考え方は、エリクソンも、R. I. エバンスとの対話の中でとりあげ、賛意を示している。なお、コンピテンスという概念は、人間が単なる意向的な動機によって左右されるのではなく、自我の中に既に成長に対する動機を持つと考える考え方である。自我心理学の中にも、コンピテンスの考え方はあり、それは「葛藤外の自我エネルギー (conflict-free ego energy)」と呼ばれる概念である。

〔参考文献〕

- E. H. エリクソン 鐘幹八郎訳『洞察と責任』誠信書房、1972、pp. 267-268 (生いたちと業績)
- 小此木啓吾著 「アイデンティティ論」(『現代のエスプリーアイデンティティ』78号 1973、所収)
- 生越達美著 不安、断絶、自己確認—青年期理解の一視点 (名古屋学院大学論集 人文・自然篇第13巻第1号、1976、所収)
- P. Blos: On Adolescence—A Psychoanalytic Interpretation 1962
- R. I. エバンス 岡堂哲雄、中園正身訳『エリクソンとの対話—アイデンティティの探究』金沢文庫、1973、pp. 151-155 特に p. 38、p. 110 にはホワイトの成長動機に関する記述あり。(Richard I. Evans: Dialogue with Erik Erikson, E. P. Dutton 1969, p. 26, p. 86)
- 加藤正明、保崎秀夫、他編『精神医学辞典』弘文堂、1974、p. 695
- 外林大作、他編『心理学辞典』誠信書房、1971、p. 456
- Benjamin B. Wolman ed., International Encyclopedia of Psychiatry Psychology Psychoanalysis and Neurology (vol. 4) Van Nostrand Reinhold 1977,

p. 370

E. H. Erikson: *Childhood and Society* (2nd ed.), W. W. Norton 1963, 本書第二章 *The Theory of Infantile Sexuality* (pp. 48-108) では子供の遊びの形態 (閉じた空間, 開いた空間の問題) が論じられている。

E. H. エリクソン, 大沼隆訳『青年ルター』教文館 pp. 487-493, E. H. エリクソンの経歴が詳細に掲載されている。

3. E. H. Erikson の自我同一性概念の特徴について

普通一般に用いられている言葉としてのアイデンティティは、^(注1)「自分であること」^(注2)「自己の存在証明」^(注3)「真の自分」^(注4)「主体性」といった意味あい用いられているが、エリクソンにおいてアイデンティティが問題にされる場合は、人格的同一性 (personal identity) と自我同一性 (ego identity) の二つの概念を含んでいる。エリクソンが言うように、アイデンティティを定式化して論じることには問題があるが、一応整理する意味で記せば次のようになる。同一性 (identity) は二つに区別される。即ち、第一に、自己の単一性、連続性、不変性、独自の感覚を意味するものと、第二に、一定の対象 (人格) との間、あるいは、一定の集団およびそのメンバーとの間で是認される役割の達成や共通の価値観の共有を介して得られるところの、連帯感と安定感に基礎付けられた自己価値 (self-esteem), および、肯定的な自己像 (self-image) を意味するものがある。人間は出生以来、父母、家族をはじめとする対人関係の中で社会化され、自我の発達を遂げていく中で、家族同一性 (family identity), 集団同一性 (group identity), 日本人なら日本人としての自分 (national identity), 誰々の息子としての自分, 男性 (女性) としての自分 (sexual identity), 何々職としての自分 (professional identity) といったものを獲得していくとエリクソンはいい、これらの各同一性を統合する人格的な同一性を自我同一性 (ego identity) と名づけている。^(注2)

次にエリクソンの著書に即して、エリクソンがどのような文脈の下でアイデンティティについて述べようとしたかについて若干整理してみたい。まず、

エリクソンが『主体性—青年と危機』(1968)の中で、フロイトの文章を引用して自分自身の存在感をのべている箇所ではつぎのように記している。

「わたしの苦難だらけの人生行路にとっては必要不可欠なものとなっていた以下の二つの特徴は、ひとえにわたしのユダヤ人としての性質に負うものだという自覚が、わたしにはあったのでございます。その二つの特徴とは、第一に、わたしはユダヤ人でありましたために、数多くの偏見から自由であったことであります。他の民族の人々は、まさにそのような偏見のゆえに、知性の働きが限定されていたわけです。第二の特徴とは、わたしはユダヤ人であったため、いつでも野党に組みする用意が出来ており、「団結固い多数派」と折り合わなくともやっつけられる備えができていたということであります。」^(注3)

この記述が引用された理由は、エリクソンが「自分の存在を支えているものは、確かに自分のユダヤ人の血統あるいは人種的な基礎であり、ユダヤ人の中にある共通の感覚が自分に安定感を与えていて、自分の進路を決定した要素になっている」ということを言いたかったためである。いま、アイデンティティという言葉がこの感覚に付けるならば「民族的アイデンティティ」ということになる。

他の例をもう一つ挙げれば、エリクソンが William James の手紙の文を評してのべた記事に次の文がみられる。

「わたしが、アイデンティティの感覚とでも呼びたいものは、活気ある斉一性と連続性との主観的感覚として妻にあてた William James の手紙のなかに最も良く描写されているように私には思われる」(点線部分原文 as a subjective sense of an invigorating sameness and continuity)^(注4)

以上の例を手がかりとして、エリクソンのアイデンティティ概念の特徴といえるものを挙げると次のようになる。

第一に、エリクソンのアイデンティティ概念は、何か自分の所属する運命共同体 (民族, 人種) によって担われている普遍的永遠的な価値と、それから、自分の持つ個人的な価値との共有 (participation) といったものをさ

していると考えることができる。フロイトの場合は、自我に安定感を与えるものという意味でアイデンティティを強調しているが、エリクソンの場合は、むしろ、個人の使命感や価値を作りあげる契機というような、より positive な面を強調している点があげられる。若干難解な箇所であるが、参考として次の記述を引用する。

「しかし、ここではまず、人格的アイデンティティ (personal identity) と自我アイデンティティ (ego identity) を区別しておく必要がある。人格的アイデンティティを持っているという意識的な感覚というのは、二つの同時存在的観察にもとづいている。時空における自分の存在の斉一性 (self-sameness) と連続性 (continuity) の自覚、および、他人が自分の同一性と連続性を認めているという事実の自覚である。しかし、わたしが自我アイデンティティと呼ぶものは、存在の単なる事実以上のもの、いわば、この存在の自我資質 (ego quality) のようなものに関連している。したがって自我アイデンティティとは、その主観的局面上では次のような自覚である。つまり第一に、自我の総合方法 (ego's synthesizing methods) にそれ自体の斉一性と連続性があるという自覚である。この自我の方法は、自分の個性的な存在スタイル (self style of one's individuality) でもある。第二に、このスタイルが、自分が直接接触する共同団体の重要な他者に対する自己の意味 (one's meaning for significant others) の斉一性と持続性とに合致 (coincide with) しているという事実の自覚である。」^(注5)

第三にエリクソンは、アイデンティティという用語を用いる際に、“a sense of identity” という点を特に強調する点を挙げることができる。すなわち、アイデンティティとは、^(注6)「自明の感覚」という意味を強く持っている概念であって、健康感 (sense of health)、うまくいっていない感じ (sense of not being well) と同じ性格の感覚であるということになる。この辺の意味あいについては、エリクソンが『自我同一性』(『Identity and the Life Cycle』(1959) の中に次の様に記している。

「この感覚は表層と深層、意識と無意識の双方にまたがっている。(中略) この感覚は内省 (introspection) によって近づきうる意識的な「経験」の仕方、他人にも観察可能な「行動の仕方」、テストや分析方法で実証可能な無意識的な内的状態の次元を含む」^(注7)

第四に、アイデンティティは、否定的 (negative) な意味と、肯定的 (positive) な意味の双方を含んだものであり、否定的なアイデンティティ (negative identity) の克服の上に確立された肯定的なアイデンティティ (positive identity) が真のアイデンティティであるとされる点が挙げられる。^(注8) 伝記に表われた例として、エリクソンが『洞察と責任』(Insight and Responsibility 1964) の中で書いている次の箇所は極めてこの点の理解に都合が良いと思われる。

「ルーテル、ガンジー、ケルケゴールといった人は、自分の日記や公刊の書の中に、何が彼らの「禍い」であるかをはっきり述べて怖れるところがなかった。(中略) ガンジーにあっては父の死であった。あるいはむしろいろいろの機会でも同じであったが、最後に父の死にまで追い込んでしまったという確たる妄信であった。」^(注9)

「彼らは、自分たちが価値のないものだという強い意識を持ち、同時に「究極的なものへの関心」に早くから目覚めている。」^(注10)

「彼らは青年時代にこのような意識や関心を習慣的な、誰れもがやるような方法で忘れ去ろうとする。短い暗澹たる時期にルーテルは歌を歌い、ガンジーはワルツを踊り、ケルケゴールは酒を飲んでいる。しかし、やがて幼年期に培われた自分達が選ばれたものであるという意識が、次のような自己の確信のうちに根ができれば始める。すなわち、すべての生き物へとまで拡大されていないとしても、人類に対する重い責任を背負っているという信念によって生活し、そのために「偉大なる自己放棄」を行い、これが逆に(ウィルソンが言うように)「もっと大きなスケールで活動すること」に身を捧げる」かたちで、背負う重荷から解放されることになるのである。」^(注11)

「従って創造的な個人は、否定的アイデンティティ (negative identity)

を自己蘇生の最も基本的な出発点 (the very base line of recovery) として受け入れねばならないように思われる。^(注12)

以上のような諸点からも、エリクソンがアイデンティティを、その「光の部分」と「影の部分」の対比において把握しようと試みた事が理解できる。エリクソンの肯定的アイデンティティ、否定的アイデンティティの考え方を教育的な観点からみれば、1から10まで優等生で歩んできた人間は、真のアイデンティティの確立は出来ないということになるかもしれない。また、真のアイデンティティは、いわゆる否定媒介的に確立されるものということなのかかもしれない。

第五に、アイデンティティの感覚を担うような自我 (ego) の正体は何かという点について考察してみる。

エリクソンによれば、自我とは、個人の内的な生活とそれを取りまく社会文化的な環境のバインダー (統合者 binder) であるという。つまり、社会の中から受け取ったものを創造的価値に仕上げていくというようなものが、「自我」であることになる。だから、エリクソンにおける自我の発達とは、社会文化的な環境のエレメントを自己が取り込む統合性の発達ということができる。そこでの問題は、自制的な展開過程としてのイド (id) の発達や生物学的なさまざまな要求の発達が、社会的環境の中でどのようなクライシスとして現れるかということ、生物学的成熟過程が、それに対応して出会う社会的環境などのさまざまなエレメントをどのように統合して発達していくかということである。この点についてエリクソンは、バインディングエレメント (binding element) としての自我は、さまざまな社会様式 (social modality) へ向かうものであるとしている。たとえば、本能的な欲動である id (エス Es) の発達につながるような生物学的な様式 (modality) (たとえば、口唇期 (oral phase) では「吸う」「噛む」というような意味において「何かを獲得する」という様式など) は、未だ社会化された様式ではないのであって、対人的な環境の中で、適切なふるまい方の様式を見つけてはじめて社会的なものとなり、社会的様式が作られることになる。この

ことによって、子供は自分の生物学的機能と社会的関係の調和統合を遂げていくことが出来ることになる。

エリクソンの発達説の特徴は、社会的様式の獲得過程において (出生から成熟期に至るまで (自我が、常に、いわゆる原始的状況に直面し、そのたびに心理・社会的危機 (psychosocial crisis) と呼ばれる危機的状況に直面するという考え方であり、社会的文化的条件は変わっても原始的状況 (リビドーに支配される存在としての人間、生物学的存在としての人間) はすべて共通しているという前提にたっている。そこで、統合性の発達ということは、各年齢に特徴的な、危機的状況における幾度ものアイデンティティの確立を通して達成されることになる。だから、エリクソンのアイデンティティ概念の把握は、エリクソンの提示する発達段階表 (epigenetic diagram) に即して発達論的に検討されねばならないことになる。

[注]

(注1) 前掲『精神医学辞典』p. 236

(注2) 小此木啓吾著「アイデンティティ論」(『現代のエスプリ』78号 1973, 所収)

(注3) 前掲『主体性—青年と危機』p.12 (Identity—Youth and Crisis pp. 20-21)

(注4) 同書 p. 9 参照 (傍線部, 原文 p. 12)

(注5) 同書 pp. 55-56 (原文 p. 50)

(注6) たとえばジェームスの性格描写についてのエリクソンの説明の中で次の様に記している。

「ジェームスは「性格」という言葉を使っているが、わたしとしては、それがアイデンティティの感覚を描写しているものであり、しかも原則的には誰でも経験できるような方法で描写しているのだと主張したい。」(傍線部原文 a sense of identity『主体性—青年と危機』p.10 Identity—Youth and Crisis p. 20)

(注7) 小此木啓吾訳『自我同一性』誠信書房 pp. 61-62 (Identity and the Life Cycle: Psychol. Issues Vol.1, No.1 (1959) New York International Universities Press, p. 50)

(注8) 前掲『主体性—青年と危機』p. 19 肯定的アイデンティティ、否定的アイ

デンティティの説明参照

(注9) 前掲『洞察と責任』p. 207

(注10) 同書 p. 208

(注11) 同書同頁

(注12) 前掲『主体性—青年と危機』p. 19 (Identity—Youth and Crisis p. 25)

4. E. H. Erikson の発達段階表について

エリクソンの『Identity and the Life Cycle』(1959) には次のような発達段階表 (epigenetic diagram) と展望図が載せられている。この表は、人間が生まれてから成熟に至るまでの生理的变化、心理的变化、生体を取りまく環境からの働きかけの諸相について展望した壮大な構想で、仮説として提示されたものである。エリクソンは、この表が、フロイトの心理的・性的発達 (psychosexual development) の構想をベースに作成されたものであるとのべている^(注1)。そして、この表は未だ完成されたものではなく、ブループリントであるということ述べているので、表の空欄の箇所が満たされたときにはじめて完成したものになる性格のものであるといえる。なお、この表の原型的なもの、エリクソンの名を一躍有名にしたところの『幼年期と社会』(Childhood and Society, 1950) に見られる^(注2)。

この表は、8つの発達段階、すなわち、乳児期 (infancy)、早期児童期 (early childhood)、遊戯期 (play age)、学齢期 (school age)、青年期 (adolescence)、初期成人期 (young adult)、成人期 (adulthood)、成熟期 (mature age) と、各時期での構成要素、すなわち、信頼の感覚 (sense of trust)、自律性の感覚 (sense of autonomy)、積極性の感覚 (sense of industry)、同一性の感覚 (sense of identity)、親密性の感覚 (sense of intimacy)、生殖性の感覚 (sense of generativity)、完全性 (統合性) の感覚 (sense of integrity)、および、これらの対概念 (否定的感覚) のマトリックスから成っている。前者の発達段階は、フロイトのリビドーの発達順序

を念頭に置いて配列されたものである。エリクソンによれば、心理的・社会的に健康な人間にあっては、乳児期には基本的信頼の感覚 (sense of basic trust) が確立され、早期児童期には自律的意志の感覚 (sense of autonomous will) が確立されるというように、発達段階表の左上から右下に至る欄の各課題が解決されていくものと想定されている。この課題とは、言うまでもなく、アイデンティティの確立ということであるが、決して各段階ごとに確実に解決されるという性質のものではない。なぜならば、発達の一つの段階から他の段階へ移行する際に、人間は準備された環境 (生物学的変化、対人関係等の社会的関係) における「出会い」(encounter) の際に「危機」(crisis) がもたらされ、そのような危機は、すでに出生時における危機にはじまり、潜在的な危機として一生を通じて降りかかるものであるという前提に立っているからである^(注3)。したがって、アイデンティティの確立という事は、エリクソンにおいては、青年期においてのみ注目されているのではなく、その時期が、他の時期に比べて特別に重要な意味を持つという点で、特に注目されるにすぎない。発達段階表において青年期のみが、各構成要素の記述が完成しているのはそのためである。このような事情から、エリクソンは、この表がブループリントであると言っているものと考えられる。

なお、この表の日本語訳はいくつか試みられているので次に一例を掲げる。しかし、エリクソンの用語が本来難解なこともあって、部分的には一考を要する訳もある。例えば、diffusion は、意味的には「風化」であるし、self-absorption は、意味的には「沈滞感」である。従って、今後、エリクソンの真意が十分汲みとれる平易な訳語の選択が課題となる。

[注]

(注1) 前掲『主体性—青年と危機』p. 118 (Identity—Youth and Crisis p. 93)

(注2) E. H. Erikson : Childhood and Society (2nd ed.) W. W. Norton, 1963, p. 273

(注3) 前掲『自我同一性』p. 57 (Identity and the Life Cycle p. 53)

(注4) 同書同頁

エリクソンの発達段階表

	1	2	3	4	5	6	7	8
I 乳児期	信対不信				極対自己分化 早熟な自己分化			
II 早期児童期		自律対疑心, 羞恥			両極対自			
III 遊戯期			積極対悪性		遊戯同一化 (エゴイナス) 空想同一性			
IV 学齢期				生産対劣等 性的期待	労働同一化 同一性喪失			
V 青年期	時間展望対時間孤独	自己確信対同一性悪感	役割実験対否定的同一性	達成の期待対労働麻痺	同一性拡散 同一性帯	性的同一性 面性的拡散	指導性の分極化 対權威の拡散	イデオロギー の分極化 対理想の拡散
VI 初期成人期					運対社会的孤立	親密対風		
VII 成人期							生殖対自己吸	
VIII 成熟期								完全対 謙遜, 頓望

(小此木啓吾訳『自我同一性』誠信書房 1973, p.158)

epigenetic diagram

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.
I INFANCY	Trust vs. Mistrust				Unipolarity vs. Premature Self-Differentiation			
II EARLY CHILDHOOD		Autonomy vs. Shame, Doubt			Bipolarity vs. Autism			
III PLAY AGE			Initiative vs. Guilt		Play Identification vs. (oedipal) Fantasy Identities			
IV SCHOOL AGE				Industry vs. Inferiority	Work Identification vs. Identity Foreclosure			
V ADOLESCENCE	Time Perspective vs. Time Diffusion	Self-Certainty vs. Identity Consciousness	Role Experimentation vs. Negative Identity	Anticipation of Achievement vs. Work Paralysis	Identity vs. Identity Diffusion	Sexual Identity vs. Bisexual Diffusion	Leadership Polarization vs. Authority Diffusion	Ideological Polarization vs. Diffusion of Ideals
VI YOUNG ADULT					Solidarity vs. Social Isolation	Intimacy vs. Isolation		
VII ADULTHOOD							Generativity vs. Self-Absorption	
VIII MATURE AGE								Integrity vs. Disput, Despair

(E. H. Erikson: Identity and the Life Cycle, International University Press. 1959, p.120)

A Psychosocial Crises	B Radius of Significant Relations	C Related Elements of Social Order	D Psychosocial Modalities	E Psychosexual Stages
I Trust vs. Mistrust	Maternal Person	Cosmic Order	To get To give in return	Oral-Respiratory, Sensory-Kinesthetic (Incorporative Modes)
II Autonomy vs. Shame, Doubt	Parental Persons	"Law and Order"	To hold (on) To let (go)	Anal-Urethral, Muscular (Retentive-Eliminative)
III Initiative vs. Guilt	Basic Family	Ideal Prototypes	To make (=going after) To make like (=playing)	Infantile-Genital, Locomotor (Intrusive, Inclusive)
IV Industry vs. Inferiority	"Neighborhood," School	Technological Elements	To make things (=completing) To make things together	"Latency"
V Identity and Reputation vs. Identity Diffusion	Peer Groups and Outgroups; Models of Leadership	Ideological Perspectives	To be oneself (or not to be) To share being oneself	Puberty
VI Intimacy vs. Solidarity vs. Isolation	Partners in friend- ship, sex, competi- tion, cooperation	Patterns of Cooperation and Competition	To lose and find oneself in another	Genitality
VII Generativity vs. Self-Absorption	Divided labor and shared household	Currents of Education and Tradition	To make be To take care of	
VIII Integrity vs. Despair	"Mankind" "My Kind"	Wisdom	To be, through having been To face not being	

(E.H.Erikson: Identity and the Life Cycle, International University Press 1959, p.166)

E. H. Erikson の自我同一性 (Ego Identity) についての一考察

展 望 図

	A 心理・社会的危 機	B 重要な対人関係 の範囲	C 関係の深い社会 秩序要素	D 心理・社会的様 式	E 心理・性的段階
I	信頼感 対 不信感	母親的人物	宇宙的秩序	得 る お返しに与える	口愛—呼吸 感覚—運動段階 (合体的様式)
II	自律感 対 恥・疑惑	親的な人物 (複 数)	法律と秩序	保 持 す る 手 放 す	肛門—尿道段階 筋肉 (貯留—排 泄の様式)
III	積極性 対 罪悪感	基本的家族	理想的の原型	思い通りにする (=追いかける) まねをする (=遊ぶ)	幼児—性格, 歩 行段階 (侵入—包括的 様式)
IV	勤勉感 対 劣等感	"近 隣" 学 校	テクノロジー 的要素	ものをつくる (=完成する) ものを一緒につ くる	"潜伏期"
V	同一性 対 同一性拡散	仲間集団と外 集団 指導性のモデ ル	イデオロギー 的な展望	自分自身である (または、自分自 身でないこと) 自分自身である ことの共有	思 春 期
VI	親密感・連帯感 対 孤立感	友情・性愛・競 争協力関係のパ ートナー	協同と競争の 模範	他者の中で自分 を失い、発見す る	性 器 性
VII	生殖感 対 沈滞感	分業と家事の 共有	教育と伝統の 流れ	世 話 を す る	
VIII	統合感 対 絶望感	"人 類" "わが種族"	知 恵	あるがままに存 在する, 非存在 (死)に直面する	

(本表は、小此木啓吾訳『自我同一性』誠信書房1973, p.216に掲載されている訳に一部修正を加えたものである。)

5. 青年期以前の各発達段階における自我同一性
確立の諸相

1) 第一段階、乳児期 (infancy)

エリクソンの基本的な発想と前提は、フロイトが口唇期 (oral stage) と名付けた段階に相当するこの段階の説明でほとんど明らかになっている。エリクソンは、この段階を心理的性的段階 (psychosexual stage) という意

味で口愛—呼吸・感覚—運動段階(oral—respiratory sensory—kinesthetic stage) と名付けている。^(注1)この段階については、次の段階との関連まで含めて要点を整理してみる。エリクソンは、フロイトに従って、イド(id)の発達を論ずる際に、ゾーン(zone)とモード(mode)に分ける。ゾーンはいわゆる性感帯で、モードはそのゾーンにおけるリビドーの「充足の様式」をさす。しかし、エリクソンにおいては、フロイトが意味するモードの意味を更に拡張して用いている。たとえば、フロイトでは口唇期の主要なモードは乳児の「吸う」「噛む」というものであるが、エリクソンの場合は、フロイトの指摘する「吸う」「噛む」という事の他に、乳を口に含んだまま保持しておくという際の「保持(retention)」乳を口に含んだまま吐き出すという際の「排泄(elimination)」という行為も補助的モードとして考える。この補助的モード(auxiliary modes)においては個人差が大で、ある子供では補助的モードが見られない場合もあるという。内面的なコントロール(inner control)が欠けていたり、食べものと口を開いて感じる楽しみの間適切な相互調節(mutual regulation)が無かったりすると、補助的モードが一人歩きを始めるほど過度で支配的になり固着(fixation)という状態が生じる。たとえば、口を用いて物を吸ったり、噛んだりすることから満足が得られないと、すぐ物を嚙んだりする一種の異常(deviation)を持つ子供になるという。^(注2)特に神経質な赤ん坊の場合は、乳を飲まないで口の中に入れながらはき出してしまふ例があるが、エリクソンはこの場合は、「吸う」という楽しみと内面的コントロールの適切な相互調節が存在していないのだという。その契機としては、赤ん坊が満腹なのに、母親が非常に神経質であり過度の乳を飲ませるといふこともあるし、赤ん坊の方の乳を飲むという動機がかき乱されていることもあるという。エリクソンはこの様な例を出したあとで、独自の概念である社会的様式(social modality)を出す。「吸う」「噛む」といふような単なる生理的活動様式が、対人的交渉の様式にまで拡張される場合には、社会的様式ということになるが、エリクソンの説明では次のようになる。赤ん坊が「吸う」から「噛む」へ移行するときに

「物を取る」といふ社会的様式が成立する。それは「吸う」から「噛む」といふ状態に移行することは、自分の意識によって相手を調整し、あるいは、相手に圧力を加えるという対人交渉様式が幼いながらも始めて成立してくることを意味するからである。もっともこの事は、内容的にはごく普通の母子関係のバランスという事に他ならないことであるが、エリクソンの主張の主眼は、母親と赤ん坊の間の相互のコントロールという相互調節は最初から存在していて、赤ん坊の側にも生産的な社会的な調整というものが潜んでおり、単純な生理的充足行為と見られるものも常に相互調節の過程にかかわっているという点である。^(注3)この点で、エリクソンがリビドーの充足の様式をフロイトよりも重視したことが明らかになる。エリクソンの発達段階表において、精神的に健康な成長を遂げる人間は常に斜め下に進行するという仮説にたつことは前述のとおりであるが、斜め下に進行せずに横の方向への発展傾向のある場合は、一種のゾーン・フィクセーション(zone fixation 区域固着)であり、縦の方向への発展傾向がある場合には、モード・フィクセーション(mode fixation 様式固着)という事になる。たとえば、「物を握む」といふモードが早期児童期(発達段階表第二段階)以降も続いて「物を相手に与える」といふような観念がない場合は、モード・フィクセーションを起こしているという事になる。フロイトはゾーンのフィクセーションのみを問題にした。たとえば、固着点の水準においては、口唇期への固着(oral fixation)、肛門期への固着(anal fixation)、エディプス期への固着(oedipal fixation)などを、また、固着の領域においては、リビドーへの固着(libidinal fixation)、自我の固着(ego fixation)などを問題にした。^(注4)エリクソンは、モードの固着をも問題にした。エリクソンは、ゾーンとモードの両面における正常な段階の発達を、正常な人格の発達と考えたのである。だからエリクソンは次のようにいう。

「新しい発達段階は、新規のモードやゾーンを作り出すのではなく、既知のモードやゾーンを更に一層十分に経験し、もっと統制的に支配し、それらのもつ社会的意義をある程度決定的に完成することである。」^(注5)

オーソドックスなフロイトの心理学では、エリクソンのいう口唇期の補助的モード（保持、排泄）は、肛門期になって始めて現われると考えられるがエリクソンはそれに反対であって、肛門期になって始めて新しく創造されるわけではなく、口唇期に潜在的に存在していたという考え方である。^(注6) ですから補助的モードが突然現われるのではなく、口唇期にあったモードが肛門期で完成されて、社会的意義が確認されるという事が大事なのだという。

口唇期に限らず、すべての発達段階において、適切な段階にモードが出現せずに、先行状態において顕在化し一人歩きしてしまった場合はどうなるかという、早すぎる補助的モードの出現はその固着をもたらし、早発性の（完成度の低い）逸脱した行為を持つような社会的交渉様式をつくることになる。早めに「保持」という社会的交渉の様式を獲得しすぎた赤ん坊は、仲々その固着からのがれることはできず、対人交渉の様式は、相手から奪ったものを、いつまでも保持しているという様式しかとれなくなってしまうこと^(注7)になる。

これらの障害は、母親と乳児の相互交渉の不完全性に由来することは前述のとおりであるが、「母性愛の剝奪 (maternal deprivation)」という重要な問題については、スピッツ (René Spitz 1887-1974) とボールビー (John Bowlby 1907~) による有名な研究があり、エリクソンの^(注8) 見解と符合する点があるので若干とりあげてみる。

乳幼児が母親またはその代理となる人物から、母性的な愛情的養育を受けられなくなることを母性愛の剝奪といい、母性愛の剝奪は、母またはその代理が実際にいなくなる場合や、母親が、情緒的障害により子に対して母性的な愛情的養育態度をとれなくなる場合に生じる。母性愛の剝奪が乳幼児の心身の発育にさまざまな障害をもたらすことについては、両者の観察研究があり、次のような報告がある。

(スピッツの研究)

乳児が母親から引き離された後、徐々に泣きやすく、気むずかしくなり、

体重減少、睡眠障害などが発生してくるが、さらに3ヶ月以上たつと、周囲の状況に対する反応性が減退し、もはや泣いたり叫んだりしなくなり、運動が緩慢になり、うつろな目つき、無表情を示すようになる。スピッツは、この3ヶ月後に現われてくる状態を、自己依存的抑うつ (anaclitic depression)^(注9) と名付けた。そして母性愛的養育を失う前に、少なくとも6ヶ月以上良い母子関係にあった乳児のみが、この種の抑うつ状態を示し、また、母性愛的養育の再獲得とともに、比較的すみやかに抑うつが解消するのに対して、はじめから母性愛的な養育が得られなかった乳児の場合は、別の、より重篤な障害であるホスピタリズム (hospitalism) が生じる。したがって、生後一年以内における母性愛に根ざした養育が乳児の心身の発達に重要な役割を^(注10)持つ。

(ボールビーの研究)

ボールビーは、乳児が母に愛着するのは、母が乳児の食欲など生物学的な本能を授乳などの形で充足するからであり、これらの生物学的な本能が乳児の根源的欲求であるとする初期の精神分析の考え方を批判した。そしてむしろ、乳児が母との関係で示す、吸う、しがみつく、笑う、後を追うなどの行動にみられるような母への愛着そのものが一次的欲求であると主張し、これらの行動と母の側の母性的養育態度が相補的な関係にあることを指摘した。だからこのような対象関係的な見地からは、母性的養育の喪失は内的対象関係の障害を生み、その後の乳児の人格の構造的な発達に重篤な影響を及ぼす^(注11)ことが明らかになる。

ところで、エリクソンの見解は次のようになる。エリクソンは、乳児が最初期からすでに自閉的傾向を持っていて、自分の信頼感の源泉を失ってしまうと、自分の内界にとじこもって外部との関係を持たなくなるのだと考える。そしてこの傾向の現れを prematual self-differentiation (早発性の自我の分化) と呼んでいる。そこで、エリクソンの「発達の方向」という考

え方を入れると次のように最初期乳児期の特徴をまとめることができる。

最初期乳児期の子供は、① maternal person (母親もしくは母親に代わるもの) に依存し、そういう経路を通じて外部の世界との基本的な信頼感を獲得していくか、または、② anaclitic な depression (自己依存的抑うつ) を通して自分の内側に閉じこもり、外部とのつながりの信頼を失なってしまう状態になるかのいずれかの発達形態になる。こういう発達の様式というものは両極的 (bipolar) なもので、他の発達段階においても常にそうであり、多方向的な発達の可能性があるわけではなく、あちらかこちらかという二組の可能性^(注12)があるのみである。乳幼児において獲得される trust (信頼) とか mistrust (不信) の感覚というものは、倫理的な固苦しいものとは違って、文字どおり「a sense of trust」または「affective feeling of having achieved of things」で表現される「何かを達成した」とか「失敗した」という情動的感觉についてのものであり、生理的に充足して不安や恐怖のないことが trust の感覚につながる。そういう意味においてスピッツ、ボールビーのいう母性愛が大切なものになってくるわけである。

母親というものは、エリクソンにいわせれば、「乳児にとっての文化の代表者」であり、母親、父親、家族、仲間、集団というように子供にとって文化の範囲が拡大していく出発点である。この点で、エリクソンは比較文化的な研究にも熱心であり、特に『幼年期と社会』(Child and Society 1955) では、アメリカインディアンのスー族 (Sioux) とユーロク族 (Yourk) の2つの種族について比較文化的研究を行なっている。この研究は、母子間の相互調節の型が特定のモードを作り、そのモードが社会的様式 (social modality) をつくり、ひいては文化の形を作っていく、それがまた母子間の相互調節の型を規定するというような循環を通して、子供の発達に関与していくという事を、アメリカインディアンを借りて実証的に示そうとしたものである。ただし、エリクソンの場合は、フロム (Erich Fromm) その他の文化学派と異なって、文化の型が直接子供の発達に大きな比重で関与してくるとは考えない。^(注14) スー族とユーロク族を例にとると、スー族では無制限の

trust が最高の理想であり価値だとされるのに対して、ユーロク族では無制限の mistrust が価値だとされる。スー族の文化では、(trust 対 mistrust という発達段階は、常に、trust 側に片よっていればいるほど望ましい解決の方法ということになる。もし、mistrust 的価値を持つ人があれば、彼はスー族では不適応な異常な人格の持主であり、価値のない人間となるが、ユーロク族では適応した価値のある人格とされることになる。このように、文化は人間の経験に参与することができる^(注15)とエリクソンは考えているのであるが、その意味は、人間を無制限に右から左へとかえることができるというものではないということになる。

最後に、trust と mistrust という言葉についてふれてみたい。通常の常識的概念に従えば、trust の方がより高い価値で、mistrust の方は低い価値と考えがちであるが、それは誤りである。エリクソンは次のように言っている。

「人は trust という価値以外に、mistrust という価値を知らねばなら^(注15)ない。」

つまり、trust という価値以外を知らない人間は、結局は trust それ自身の価値を本当に知ったことにならないのだということを意味している。健康人は健康の真の価値を知らないのであり、不健康な人が健康の価値を知っているという平凡な例え、エリクソンの言わんとすることの良い例である。エリクソンは第一段階のまとめとして、しばしば繰返される mistrust というものは、後の宗教的信条の基礎になるという^(注16)。trust の感覚を保持して充足していく人間も、mistrust の感覚をもって常に何かを求めてやまない人間も、いずれも人間に共通の価値をとり入れていっているという意味では同じなのだ^(注16)とエリクソンは結論しているのかもしれない。

[注]

[注1] 展望表 (p.19) 参照

[注2] 前掲『自我同一性』p.65 (Identity and the Life Cycle p.58)

(注3) 同書 p. 58 (前掲原文 p. 55)

(注4) 同書 p. 53

(注5) 前掲 *Childhood and Society* (2nd ed.) p. 78

A new stage does not mean the initiation of a new zone or mode but the readiness to experience both more exclusively to master them more coordinately, and to learn their social meaning with a certain finality.

(注6) 前掲『自我同一性』p. 58

(注7) 同書 p. 68

(注8) 加藤正明、保崎秀夫他編『精神医学辞典』p. 604. 特に R. Spitz については p. 719

(注9) 前掲『自我同一性』p. 67 (Identity and the Life Cycle p. 60)

(注10) R. I. エバンス、岡堂哲雄、中園正身訳『エリクソンとの対話—アイデンティティの探究』金沢文庫 1973. p. 26

(注11) 前掲『精神医学辞典』p. 604

(注12) 前掲『自我同一性』p. 186 (Identity and the Life Cycle pp. 139-140)

(注13) 後述〔参考〕を参照

(注14) 前掲『エリクソンとの対話—アイデンティティの探究』p. 146

(注15) 同書 p. 24 (R. I. Evance : Dialogue with Erik Erikson, E. P. Dutton 1969. p. 15)

(注16) 前掲『自我同一性』p. 73 (Identity and the Life Cycle p. 65)

〔参考〕

エリクソンによるアメリカインディアンの比較文化的研究 (スー族とユーロク族の比較)

エリクソンは1938年に、アメリカインディアンの集団的アイデンティティを調査するため、文化人類学者 H.S. メキール (H. S. Mekeel) と共にスー族 (Sioux) とユーロク族 (Yurok) の比較文化的分析 (cross cultural analysis) を実施した。その両者の観察結果の比較から、乳児のしつけ方の相違による文化の型の相違を確かめ、第一段階 (trust 対 mistrust) の仮説

を検証した。

(スー族)

スー族は、アメリカ中部ダコタ高原に住むインディアンで、元来は戦闘的狩猟民族であったが、白人が入ってくるようになってからは、連邦政府の補助金で細々と「居候的生活」を送っている。(現在保護地区 reservation となっている。) したがって、スー族は一見外見は怠惰で無能に見えるが、実際はダコタ高原の良き時代へのノスタルジアをもっている。エリクソンはこの現象を一種の補償神経症 (compensation neurosis) とみる。スー族の価値観は、狩猟民族の特徴であるところの、所有権の尊重と信用 (trust) であり、それがこの種族の至上の価値である。文化人類学上の常識として、このような価値、理想は隠れた文化 (covert culture) として残り続けるものと考えられているが、エリクソンは、スー族が白人によりこのことを無視されてきたと考えている。スー族は「競争心」をはじめから持たない民族で、この点が子供のしつけ方に反映し、授乳の方法は、禁止を含まない無制限の許容で、離乳のしつけというものはなかった。だから、スー族のしつけの型そのものが、子供のエネルギーの自由な処理を許すような方向へ導くものであり、言い換えれば、無制限のトラストのうえに行動ができる文化環境が存在している。また、社会的様式に目を向けると、スー族の子供は、自分の歯を用いた遊び (カチカチと鳴らすことなど) が多いという。これは、「噛みたい」という願望のフラストレーションであるとエリクソンはいう。その理由として、スー族は皮を髣すという技術を持たなかったので、皮を歯で噛んでもみ、山あらしの針で縫うという習慣があったが、そのことは今日では出来なくなり、衝動としての「噛む」という行為が文化的習慣の中に残ったのだという。したがって種族に本質的なアイデンティティというものは文化の体系の中に組み込まれて、個人の行為にも深く影響を与えるのだということになる。

(ユーロク族)

ユーロク族は、北カリフォルニアに住むインディアンである。ユーロク族はスー族と異って、鮭の棲む川に沿って住む種族であり、狩猟民族と異って閉鎖的で定住的な生活を送り、移住の可能性はない。そこで、生活資源を鮭に頼らざるを得ないので、超自然的な力の恩恵に頼って生活する以外にない。そこで、当然祈ったりする贖罪的な儀式面が多く宗教的モラルは発達している。そして、各家族はバラバラで、地域社会意識が無く、各自自尊心が強く、他人の侵入に対しては強い抵抗を示す。離乳の時期は早く、6ヶ月で離乳する(スー族と反対)。ユーロク族の基調をなす社会様式は、習慣化された行為と、他者への制限であって、スー族のような無制限のトラストは存在しない。

〔参考文献〕

- 前掲『エリクソンとの対話—アイデンティティの探究』pp. 52-68, 77-82
 前掲 *Childhood and Society* pp. 114-165
 前掲『自我同一性』pp. 8-12
 前掲『主体性—青年と危機』pp. 53-58 (*Identity—Youth and Crisis* pp. 51-52)

2) 第二段階 早期児童期 (early childhood)

第一段階がフロイトの口唇(愛)期の段階といえるのに対して、第二段階は大まかに言って、フロイトの肛門期(anal phase)にあたる。口唇期では、エリクソンは、子供が母親に対する一方的な依存性を作るというのであるが、この段階では、子供は一方的な依存性への反逆、および、そのまた反逆を持ち、そのことによって子供は一方では自分の環境(母親または母親的な人)の持っている許容度を超えるのではないかという恐れを持つようになるという。つまり、この時期は、反抗という自律性の感覚(sense of auto-

nomy)と、反抗に対する疑惑、猜疑の感覚(sense of shame, doubt)が同時に生じる時期である。^(注1)だから、エリクソンに言わせれば、子供は、自分が何かになりたいと望むということを学ばねばならないし、それから、いままでに何かになりたかったということを自分が望んだという自分自身に対する自己確認(self affirmation)を持たねばならない。^(注2)子供は以上のべたような状況に直面し、まさに自律性の獲得のための戦い(battle for autonomy)の主役になるということになり、自律性の獲得が、この時期におけるアイデンティティの確立ということになる。この時期のモードの特徴は、いうまでもなく、保持(retention)と排泄(elimination)のアンビバレント(ambivalent)な葛藤(conflict)、すなわち、なにか自分の中にしっかり保持しておくことと、それを適切な機会に放散するということの葛藤である。エリクソンは社会とその社会の発展形態に関心を持っていたわけであるが、比較文明論的に見た若い国と成熟した国の違いは次のようになる。すなわち、適切に獲得し、適切に与えるという保持と放散の使い分けは、たいいていの先進国、または西洋文化における重要なキポイント(葛藤)になっているのに対して、ある種の未開文化においては、先進国におけるような葛藤が少ない文化が存在していて、マーガレット・ミード(Margaret Mead)の論じているアメリカインディアン文化の場合は、さまざまな財産をつくりあげても、自分で一方的に保持するという状態は少なく、その財産をコミュニティの維持ということと両立させている例があるという。^(注3)ところで、子供はこのような困難に晒されるので、自分自身で操作しうるような道具というものを必要とするようになり、子供の玩具に対する関心のめばえが生じる。また、無力と絶望の表現というものが、母親からの救済をもたらすということを知るようになり、特定の人物(救済をもたらすようなタイプの人)に対する仮定的な愛着を作り出す源泉になるとエリクソンはいう。第一段階におけるトラストというものは、宇宙的(cosmic)なもので、母親は世界の代表者であり、母親に対する無条件のトラストの感覚に通じている。だがこの段階ではもはや、子供は自分に対立するような外的環境というもの

は必ずしも無制限な愛情を自分にもたらすものではなく、特定の人物、特定の源泉によって担われているという感覚を獲得することになる。いいかえれば、第一段階では、母子間に相互信頼 (mutual trust) というものが作り出されて、いわば、親子が一体となって外的環境にたち向かうということが問題であったが、第二段階では、子供はアンビバレンスを脱出しなければならぬので、第一段階で作られた mutual な trust の枠をきっぱり捨ててその外に出ようとする。そして、自分の自律性を獲得しようとする。この場合、自律性の感覚と疑惑・猜疑の感覚がどの程度まで許容されるかということ (外界より徳 (virtue) として評価される度合) は、子供を取りまく文化の中に潜む価値の定義により規定されるところが極めて大きい^(注4)という。そこで一例として、アメリカ的価値観と日本的価値観からみた子供のしつけ方の対比においてこの問題を考えてみたい。

(例) 「アメリカ人の夫妻がいて、共働きなので、日本人のお手伝いさんに子供を預けた。夫妻は実際はこのお手伝いさんを気に入っていなかったのだが、よけいなことを言うと逃げられてしまうかと思ひ何も口に出さなかった。気に入らない点というのは、ふとある人にもらしたところによると、日本人のお手伝いさんは非常に寛大であり、悪くいうと大変だしがないという。つまり子供を厳しく育てないし、叱らないということであった。その反面、そのお手伝いさんは、トイレトレーニングだけは非常に厳しくて、一才の子供でもおもらしをするとすぐ叱り、早く清潔に^(注5)する習慣をつけようとしていると言っていた。」

この例は、結局はアメリカ人と日本人の習慣の相違という事になるが、エリクソンが言うように、しつけの型に文化的な価値が非常に早くから関与してくる例であるといえる。文化の中に潜む暗黙の価値体系は子供の危機 (crisis) の解決の時期 (アイデンティティの確立の時期) に影響するわけで、日本の場合のいわゆる母性型文化と、アメリカの場合の父性型文化では、その中に育つ人間の人格に大きな影響を与えずにはおかない。この点に関して、エリクソンの説への共鳴が執筆の動機であるとされている評論『成熟と喪失

一々母の崩壊』(江藤淳) から断片的ではあるが関連箇所を引用しておく^(注6)。

「エリクソンは、米国の青年の大部分が母親に拒否されたという心の傷を負っているという。拒否も保護過剰も成熟の妨げになることに変わりはない。現にエリクソンは、母親の拒否が、しばしば、人格の核の弱い、他人とつながることのできない人間をつくっているという。保護過剰で育てられた人間が、いつまでたっても大人になれないことは常識で考えてもわかる。しかし私はここで育児法の講釈をしようというのではない。ただ日本の母と子の密着ぶりと米国の疎隔ぶりのあいだには、ある本質的な文化の相違がうかがわれるはずだということである。エリクソンによれば、米国の母親が息子を拒むのは、やがて息子が遠いフロンティアで誰にも頼れない生活を送らなければならないことを知っているからだ^(注7)という。」

「我々は自分に似たもの、あるいは自分の延長であるものの存在しか認めがたらず、もし自分に似ていると思っていたものが「他人」であることを思い知らされると、裏切られたと感じるのである。このことは、逆にいえば日本人の生活全般に及ぼされている母親の影響の大きさを物語るものであろう^(注8)。」

「日本の母と息子の粘着性の高い関係は、おそらくこういう文化的背景から生まれたはずである^(注9)。」

さらにこの評論で江藤は、エリクソンの『幼年期と社会』(Childhood and Society 1950) の一内容にもふれ、日本型文化との対比においてアメリカのカウボーイ型の文化 (いわばフロンティアスピリット) について次のようなことをのべている。すなわち、カウボーイ型文化というのは、父性型文化の典型であり、アメリカ文化の根底にある。アメリカの青年は非常に早くから母親に対する依存を失って、彼には帰るべき故郷が無い。だから常に自分を魅惑する価値を求めて、どこかに旅していくタイプの人間として適応していかなければならない。この象徴がカウボーイである。これに対して、日本型文化は母性型文化の典型であり、何か自分の土地に定着して、常に帰っていく自分の故郷があり安定感の源泉の故郷がある。このことはいわば価値に適応

していく人間が作り出されていく原因になっている。^(注10)

以上の例も、文化の中に潜む価値体系がアイデンティティ確立に与える暗黙の影響を考える上で興味深い。

[注]

(注1) 前掲『自我同一性』p. 84

(注2) 同書 p. 89, p. 97 (Identity and the Life Cycle p. 74)

(注3) A. H. Maslow 上田吉一訳『人間性の最高価値』誠信書房 1973 第14章
参照 (The Further Reaches of Human Nature 1971, pp. 199-239)

(注4) 前掲『自我同一性』p. 77

(注5) 関計夫著『アメリカ人のしつけ』慶応通信 1962, p. 24

(注6) 江藤淳著『成熟と喪失—母の崩壊』河出書房新社 1973

(注7) 同書 p. 4

(注8) 同書 pp. 6-7

(注9) 同書同頁

(注10) E. H. Erikson: Childhood and Society (2nd ed.) (1963) の第8章
「Reflection on the American Identity」の第2項「Mom」(pp. 288-290)
に、アメリカの母親の母性愛拒否 (maternal rejection) と、その環境の下で
育つアメリカ青年の様子が記されている。

3) 第三段階 遊戯期 (play age)

フロイトのいうエディプス・コンプレックス (oedipus complex) 期にあ
^(注1)たる。この時期から、子供は自分の力とか、技能とか、潜在的可能性をテストする (そのような発達段階と取り組む) とエリクソンはいう。フロイトのエディプス期に相当するのでイド (id) の発達においてはエディプス・コンフリクト (oedipus conflict, 罪の感覚 (sense of guilt) 罪の意識による葛藤) が生じる時期ということになる。エリクソンは、父親というような権威の原型に対する対立、あるいはそういう意味での最初の非常に深刻な人間

関係の葛藤を子供は味わい、罪の感覚 (sense of guilt) を生み出すという。したがって、統合者 (binder) としての自我の中には、結局これらの様々な葛藤、自発性の感覚 (sense of initiative) と罪の意識 (sense of guilt) の対立が表われてくるし、この葛藤の解決がアイデンティティの確立ということになる。この時期は、生理的には歩行能力の熟達 (mastery) と対応している。自分の自発的運動としての歩行運動が熟達することになる。また、内的な衝動の意識的な方策 (how to) というものが生まれてくる。だから普通の心理学でいう自意識というものがこの時期に初めて生まれてくる。エリクソンは、ここから自我というものは一層発展し、超自我 (super ego) も育つという。^(注2) 言い換えれば、一般に古くから言い古されているイド (id) とエゴ (ego) とスーパーエゴ (super ego) の相互のバランスというものが成立する時期である。そのうえ他方では、性的な感覚がエディプス・コンプレックスを通じて出てくるので、性差 (sex difference) の意識化が盛んになるという。^(注3) だからエリクソンもフロイトと同様に、エディプス・コンプレックスの解決のあり方が、後の発達にとって大きな影響を及ぼすとする点では同一である。

[注]

(注1) 前掲『自我同一性』p. 192

エディプス・コンプレックスはフロイトの基本概念である。フロイトは、幼児にも性的なものが存在すると考え、幼児は3~4歳になると精神的性的発達上の男根期 (phallic stage) に入り、それが6~7歳まで続くとした。幼児はこの時期に入ると性の区別に目覚め、異性の親に性的関心を抱くようになる。特に男の子は、母に対して性欲の萌しを感じ、父を恋敵とみなして父を嫉妬し、父の不在や死を願うようになる。反面彼は父を愛してもいるために、自分の抱いている敵意を苦痛に感じ、またその敵意のせいで父に処罰されるのではないかと去勢不安を抱くに至る。このような、異性の親に対する愛着、同性の親への敵意、罰せられる不安の3点を中心として発展する観念複合体を、フロイトは1900年にエディプス・コンプレックスと名付けた。

(注2) 前掲『自我同一性』p. 96

エリクソンは、積極性の偉大な統治者 (great governor) である良心 (conscience) の確立の時期とのべている。

(注3) 同書 p. 92 (Identity and the Life Cycle p. 76)

エリクソンは、幼児性欲 (infantile sexuality) と身体的成熟 (body maturity) とが分離した長期間にわたる延期が成立する時期 (フロイドの潜伏期 latency period) であるという。

4) 第四段階 学齢期 (school age)

この時期はフロイトのいう潜伏期 (latency period) とほぼ対応している。エリクソンのいうところでは、この時期は、自分の行っている行為 (能力テストとしての自分の行為) に、生産性の感覚 (sense of industry) が伴うと同時に、反面、自分は失敗するのではないかという恐怖感の両者が伴い、二つの感覚が相剋する時期であるという。身体的、筋肉的、および、感覚運動機能の発達するこの時期での発達がうまくいけば、子供は、自分の能力というものをはじめて確信することができる。したがってこの時期に、子供は「葛藤外の自由なエネルギー (conflict free energy)」^(注1)、すなわち、自己目的としての自由な能力というものを生み出す。この時期での子供の能力というものは、その能力を用いて誰かに誉められるという功利的手段として使用されるのではなくて、その自分の能力を使うことそれ自体が自己目的となっていく。だから、エリクソンは、発達の第一段階が「私は与えられる存在である (I am what I am given)」という確信を中心に具体化され、第二段階では「私は意志する存在である (I am what I will)」という確信を中心に具体化され、第三段階は「私はかくありたいと想像する存在である (I am what I can imagine)」という確信を中心に具体化されるのに対して、この時期は、「私は学ぶ存在である (I am what I learn)」^(注2)という確信の時期であるとしている。現代的な用語で言い換えると、達成欲求

(need of achievement) というような感覚が生み出されることになるかもしれない。心理学的には、前の時期におけるエディプス・コンプレックスというものを克服して、両親とそれ以外の社会的代表者を比較対象するような方向に向かい、いままで両親に一方的に依存していたことから抜けだして、いわば、社会的な制度 (social institution) に対する信頼や依存の方向へ標的が移っていく。たとえば、学校における新しい権威者としての先生への信頼といったものになっていく。前の時期までは非常に重要な社会的環境が母親であり、両親であり、家族というものであったのに対して、この時期の社会的発達としては、^(注3)「仲間の世界」が非常に重要なものとなってくる。なぜなら、仲間は子供に自尊心 (self-esteem) とか成功、失敗の基準を与えるものとして決定的役割を果たすからだという。生産性の感覚が発達するこの時期においては分業 (division of labor) の感覚や、機会均等 (equality of opportunity) の感覚が発達し、この感覚を得ることに失敗したものは劣等感 (sense of inferiority) がいつまでも遷延する危機 (deferred inferiority crisis) を孕むことになる。

〔注〕

(注1) 「葛藤外の自由なエネルギー」とは防衛機制 (defense mechanism) と区別される自我で、知能や才能を示す。ハルトマン (H. Hartman) は超自我 (super ego)、エス (Es) との葛藤にまきこまれない自我の働きを「葛藤外の自我領域 (conflict-free ego sphere)」にある自我機能と呼び、外的現実に対しても主体的な適応能力をもつ意味で自我の自律性 (ego autonomy) をもつとした。

(注2) 前掲『自我同一性』p. 101 (Identity and the Life Cycle p. 82)

(注3) 同書 p. 109

6. 青年期 (第五段階) の自我同一性確立の諸相

エリクソンの発達段階表の第五段階である青年期 (adolescence) は、エリクソンが最大の焦点をあてた時期で、非常に重要な位置を占めている。そのうえ、次に続く成人 (adult) の世界への準備期であるこの時期については、他の時期に見られないような広いシエマが描かれている。^(注1) エリクソンがなぜ青年期を重視しているかという、それは、残存的形態として生き残ってきたこれまでの各時期の危機 (crisis) が、青年期に一度に復活し再生してくるからである。もともと、エリクソンのいう危機 (crisis) は、大変ダイナミックなものであり、ある時期での危機 (crisis) が、その時期に決定的に解決されるということはなく、次の時期へと連続的に引続いていくものと考えられている。青年期の急速な身体的性器的成熟 (physical genital maturity) が青年の中に心理的生理的動揺を引起し、イド (id)、エゴ (ego)、超自我 (super ego) のバランスを大きく崩すうえに、性的欲求の増加が一度克服されたはずのエディプスの活動を復活させ、再び権威との対決、あるいは、自我の強化を求める動機となり、これらのいろいろな危機 (crisis) が、残存的につづいてきた危機 (crisis) と合体してクリティカルな様相を示すことになる。^(注2) エリクソンは、自我が過去の一種の総決算を行なう時点にたたされ、過去と未来の再統合を行なう位置にたたされると言う。エリクソンは青年期を「過去に対する決別」と「未来に対する見透し」の一大分岐点とも言える時期と見ているように思われる。事実、青年期以前は、同一視 (identification) の対象であった母親、父親、尊敬すべき権威者としての教師、自分の民族といったものは、すべて「一方的」に与えられたものであり、自ら選んだものではなくて、社会的環境の中で一方的に強制され与えられてきたものであったが、この時期では、自我が過去の同一視体験を一つの素材として、同一視の対象を自ら新しく作り直さねばならないということになる。過去において一方的に割り当てられた尊敬の対象は、青年期においては必ずしもポジティブなものではなくなる。それだけに、過去における同一視

(identification) の経験の再統合に失敗すれば、同一性の拡散 (identity diffusion) が生じることになる。^(注3) この点については、エリクソンが R. I. エバンスとの対話の中で分かり易い例をあげているので次に引用する。

「アイデンティティとは (否定的なものを含む) すべて以前の同一化や自己像の統合を意味します。ある少年は、落伍者ようになった叔父を愛していたかもしれません。彼は、その叔父のようであってはならないことを非常にはっきりと知りました。しかし、叔父は、みにくい偽善者の点だけを除いて「比較的良い」両親像と並置されて彼の心の中に存在しているのです。もちろん、この多くは、無意識に進んでいきます。ところで、私たちは、たんにここで無意識を当然と考えてきたことが、ふと念頭に浮かびました。今まで述べてきたことをもう一度振り返るために、一息つくことにしましょう。非常に重要なことですが、その若者が (意識的あるいは無意識的に) 親のなかに自分の否定的アイデンティティを認めて、親との初期の同一化が以前に考えていたほど、有効で望ましいものかどうか疑いはじめるといふ事実があります。言いかえすと、アイデンティティの形式は、^(注4) 実際予想される未来に照して、以前の同一化のすべてを再構成する過程です。」

同一性の確立に成功するか、あるいは、失敗してバラバラの調和し難い理想に「引きさかれる」かは青年の直面する最大の危機 (crisis) であって、エリクソンはそれを「同一性の危機 (identity crisis)」と名付けた。エリクソンは、青年期の同一性の危機は人間の宿命なのだと言っているが、青年期をこのように見る見方は、一般に青年期疾風怒濤説、危機学説と呼ばれている。ただし、青年期疾風怒濤説に対する反対説 (青年期平穩説) もあることを付け加えておかなければならない。^(注6)

同一性の危機にはさまざまな形態がある。たとえば、非行に走るとか、神経症 (neurosis) になるとか、いろいろの前衛的芸術活動に熱中するとか、政治的運動に飛び込むとかいうのも、同一性の危機の現象形態であり、時代により、文化環境により、個人によりその様相は異なるのだとエリクソンは

^(注7) いう。ある時代に、ある文化の中では、同一性の危機が最小限にさせられる場合もある。閉鎖的な封建社会などでは、ほとんどの青年が伝統的に敷かれたレールに従って自分を定めていかざるを得ないことになるし、現代社会などでは、それと反対に、青年は確固たる信条や目標を見つけることができずにさまざまな活動の形態をとることになる。

時として、危機的状況の解決は、持続する長い時間を持つことがあるとエリクソンはいう。この現象をエリクソンは心理・社会的モラトリアム (psycho-social moratorium) ^(注8) という。モラトリアムとは元来は経済用語で、「支払猶予」、「預金封鎖」という意味であるが、エリクソンはこの用語を、人間の発達を可能ならしめる一定の準備期間を意味するところの精神分析用語に転用した。だからモラトリアムは、自分の運命の決定というものを自ら行わない、あるいは、行うことが出来ずに青年期の課題を無制限に延長していくことを意味している。潜伏期 (latency period) がちょうど心理・性的モラトリアム (psycho-sexual moratorium) ^(注9) といえる時期であって、学童期において、人々は、各々の生理的欲求 (physiological needs) を完全に抑圧するわけであるが、心理・社会的モラトリアムもこの状態と非常に似ているということになる。心理・社会的モラトリアムは、自分の運命に対する一種の「不決断」^(注9) であって、この「不決断」は善悪いずれの意味でも才能ある人間に生じ易いとエリクソンは指摘する。有能な青年ほど、さまざまな自分の可能性、役割について試行錯誤を行い、その中で自分の本質を見つけ出そうと努力するからモラトリアムという現象が生じるし、有能でない青年は能力の欠如のゆえに行動の「不決断」という現象を呈する。青年の多くは、自分の潜在的可能性のすべてを実験してみようとし、その中から真の自我をみつけだそうとする。心理・社会的モラトリアムを経て特定の行動価値を持ち、歴史的仕事をした人物は、社会の変動の時期に非常に現れ易いという。たとえば、エリクソンが宗教改革時代のルターとか、インド革命時代のガンジーに注目するのはその理由による。この点について、エリクソンは『主体性—青年と危機』(Identity—Youth and Crisis) の中で次のように述べ

ている。

「非凡な個人における誠実なる逸脱行動やアイデンティティ形成というのは、神経症的・精神病的徴候にしばしば関連している。少なくとも相対的孤立化という猶予期間の遅延と関連しているものである。わたしは、『青年ルター』(Young Man Luther 1958) において、一人の偉大な青年の苦悩を、かれの偉大性の歴史的 position という観点から検討したことがあ^(注10)る。」

次に、モードの発達段階からみた青年期の危機の様相にふれてみたい。アイデンティティの確立というのは、発達連続体にあるところの発達上の危機 (developmental crisis) を示す7つの時点にそって行われる。たとえば、幼児期 (infancy period) における信頼対不信 (trust 対 mistrust) というものは、その時期において確定的に解消されるのではなくして、残存形態として青年期においても生き残っていく。それも、連続する次の時代の危機 (crisis) の解決の中に有機的に統合されて残っていく。すなわち、信頼対不信 (trust 対 mistrust) は、青年期においては、時間展望対時間拡散 (time perspective 対 time diffusion) として残っていくし、自律性対恥・疑惑 (autonomy 対 shame・doubt) の対立は、自己確信対自意識過剰 (self-certainty 対 identity consciousness) という形式で残っていく。さらに初期成人期 (young adult) という時代においては、親密さ対孤立 (intimacy 対 isolation) という対立が生まれてくるが、例によって、エリクソンはこの危機が突然生じるとは考えないのであって、先駆形態または萌芽の形態というものが以前の時代にすでに存在していると考える。青年期 (adolescence) における先駆形態は、性的同一性対両極性拡散 (sexual identity 対 bisexual diffusion) であり、成人期 (adulthood) における発達課題である生殖性対自己専心・没頭 (generativity 対 self-absorption) というものは、先行形態として青年期における指導性の分極化対権威の拡散 (leadership polarization 対 authority diffusion) というような形態をもつ。このように7つの次元の中で、同一性対同一性拡散 (identity 対

identity diffusion) は、いわば7つの危機 (crisis) の総合点であり、総合的に解決される地点となる。^(注11) その意味で、過去の危機 (crisis) が同一性危機 (identity crisis) の中にすべて復活し、将来の危機 (crisis) は予告的形態においてこの時期にも解決されていかねばならないことになる。次に7つの次元についてその特徴をまとめてみたい。

◀第一の次元、時間展望対時間拡散 (time perspective 対 time diffusion) ▶

時間 (time) の考え方は、アイデンティティの確立において非常に本質的であって、時間展望または、時間的見透し (time perspective) がつかない青年は、直接行動に訴えるか、それとも、行動不能という状態に陥ってしまうとエリクソンはいう。すなわち、時間展望や期待を維持するという自我の機能を喪失するということは、時間というものが存在しなかった幼児初期への退行を意味する。^(注12) したがって、時間展望はアイデンティティ確立の基礎である。^(注13)

◀第二の次元、自己確信対自意識過剰 (self-certainty 対 identity consciousness) ▶

青年期には「見えと自意識過剰」の感覚 (identity consciousness) は自己確信の過剰ということの意味すると同時に、他方で、人からの注目を避けたいという意識がある。^(注14) 平易に言えば「見え」と「はにかみ」の葛藤が青年にはつきまとうものであるとエリクソンはいう。(青年期においても「見え」と「はにかみ」が残っている青年は、早期児童期の autonomy 対 shame・doubt という課題を解決していないことになる) 青年が「見え」と「はにかみ」をどのように克服していくかという、それは、他人の視点と自分の視点の一致点を求めていくことにあるという。自分の描く自己像 (self-image) が他人の評価と一致しているという感覚があれば、青年は自己確信 (self-certainty) を作る事が出来るし、それにより、自分の持つ価値が公共的な支持を受けているという感覚をつくる事ができる。^(注15)

◀第三の次元、役割実験対否定的同一性 (role experimentation 対 negative identity) ▶

青年は多くの役割について実験を行い、その中で自分に適した役割を獲得していく。役割に対する実験ということは、アイデンティティ確立の基礎として大変重要であり、青年はさまざまな可能性をさまざまな試行錯誤を通じて見つけねばならないことになる。^(注16)

◀第四の次元、達成の期待対労働麻痺 (anticipation of achievement 対 work paralysis) ▶

青年は自分の持っている勤勉の感覚 (それは学童期につくられたものであるが) を、一般的な状況やあらゆる機会において適用できるような持続的パターンとして育てあげねばならない。^(注17) たとえば、学校での特定の教科の修得をつうじて作られた勤勉の感覚というものを、生活一般に通用するものにしていく必要がある。このような自分の内側における持続的能力の形成と、それに対する自己確信というものが、青年期における一つの大きな課題であり、青年期においては、自分の要求水準と、現実の具体的成果の不完全さの葛藤が解決されなければアイデンティティの確立は達成できない。^(注18)

◀第五の次元、性的同一性対両極性拡散 (sexual identity 対 bisexual diffusion) ▶

青年期は、生物学的に両性的 (bisexual) であるとエリクソンはいう。その意味は、同性愛 (homosexuality) と異性愛の葛藤をさし、青年はこの課題を解決せねばならないことになる。^(注19) 性 (sex) に対する感覚というものは、生物学的に自明のものとして与えられているわけではなく、青年の流動的分裂 (rolling segmentation) を通して獲得せねばならない。つまり青年は自分の性に対する同一視というものを作りあげねばならず、これにより青年は同性の成人の様式に近づいていく。エリクソンは性的差違の両極化 (polarization of sexual differences) という用語を用いているが、それはアイデンティティの発達を調和させながら、男らしさと女らしさの独得の比率が念入りに作られてゆく過程のことであり、内容的には以上述べたことになる。^(注20) その意味で、青年期の一見無謀な性的欲求というものは、性的アイデンティティの確立という観点からいえば、長期的視野に立って理解されな

なければならない面もあることになる。

《第六の次元、指導性の分極化対權威の拡散 (leadership polarization 対 authority diffusion)》

青年は、特定のリーダーとの合体が自分を救うことができるという感情を持つという。リーダーとは、青年が、屈従に対する安全な対象として、また親密な相互性と正当な拒否に向っての第一歩を再学習するための案内役として、自分を提供することのできる人物をさす^(注21)。青年は、自分の社会の「權威の指標」(authority index)との一致を求めて特定のリーダーを求めるが、それに失敗すると、その反動として、熱心な内省と自己吟味に立ち戻ってしまい、自閉的傾向を持つようになる場合がある。また、青年は常に、その社会に確立されているオーソリティへの批判というもの、どこまで自分に許容できるか、どの限界において許容できるかをみきわめて、次の時代のオーソリティを確立する準備をする。そこで、オーソリティへの参与の準備は、アイデンティティの確立の上で非常に重要であることになる。一例をあげると、学生運動家のようなオーソリティは、あまりにも社会において確立されているオーソリティインデックスと類似している場合があるため、学生はかえって無意識の中に、^(注22)「反逆の一つの形態」として、社会の既成のオーソリティの方を取り入れることがあるという。その際、自らは、それに気付いていない場合が多い。だから反逆の結果として得られたオーソリティではなしに、^(注23)本当の意味でのオーソリティを青年が自らつくりあげることが重要な課題となる。

《第七の次元、イデオロギーの分極化対理想の拡散 (ideological polarization 対 diffusion of ideals)》

成熟期 (mature age) の課題である叡智 (wisdom) の獲得の先駆形態^(注24)ということになる。青年は、人生の成熟期のための基本的なフィロソフィー、イデオロギー、宗教というものを獲得せねばならない。これらが獲得できるか否かが自分自身の人生あるいは、社会に対する信頼 (trust) を決定できるか否かの分れ目になるとエリクソンはいう。言い換えれば、青年は成熟期

において社会に寄与できる普遍的な信頼 (trust) というものの先駆形態を青年期において既に獲得していなければならないということになる。それが、ひいては、人類全体に対する信頼の感覚につながるとされている。しかし青年は、一般に非妥協的であり、また、仲間の人の価値観とか、社会的規範に対して忠実でない場合が多いので、青年は、様々の役割実験 (role experimentation) を行うことになる。その際、仮りに、自分の所属するグループの意見とか価値に対立する価値観を持つ場合でも、盲目的に受け入れず、自分自身の感覚 (a sense of themselves) を育てることがどうしても必要になる。青年が一般に非常に話し好きであるという現象は、そのことを通して、アイデンティティを探索していることになる。つまり、青年は、言語的攻撃 (verbal aggression) により役割実験 (role experimentation) を行っているといえる。だから、青年の「みえっぱり」、「自己顯示」はそれほどあやしむにあたらぬことになる。エリクソンは、青年が言語をもて遊ぶこと (verbal playing) は、ある意味では、子供時代の玩具遊びの延長で、文字どおり role playing なのだという。その点で、青年期では「両親の權威」が「仲間集団の權威」によって完全にとって代わられているという点が重要である。仲間は青年の本質的サポートであり、価値の授与者となる。仲間は、いずれ青年が社会の中で主役を占め、自己の内側のアイデンティティを発見し、自己の連続性を確立する為の仲継ぎの役割を果たす。つまりここに、時代を担う創造的価値の源泉があるのだとエリクソンはいう。^(注25)過去の時代の価値を伝承し、ただそれを適応的に変形させていくだけでは、人類の歴史の発展の可能性は無いわけであるから、社会の発展のためには、その時代の中で悩み苦しみ社会の新たな目標を模索する集団がなくてはならない。その意味では、青年は自分の標準および目標と、社会の標準及び目標との間の「ズレ」に悩み、これを克服しようとする宿命を帯びている。しかし、エリクソンは次のようにもいう。「^(注26)にもかかわらず、社会の確立された標準からそれていく若者は極めて少ない」と。青年の努力は、社会の一員としての役割を明確にしようとするところにあるので、多くの反逆的行為は、目標に至

る過程であるにすぎない場合が多い。だから、革命家というような特殊な状況を担う人は、世の中に反抗的の青年が多いにもかかわらず、極めて特殊な状況の中でしか生まれないのだというエリクソンの考え方も理解に難くない。この点、次の箇所はエリクソンの青年の見方の深さを実に良く示していると思われる。

「人間というものは、多様な状況に（青年時代においては最も強烈に）反応してゆかねばならないのだということである。心理社会的発達という場面の中では、特異体質の人間や、反逆者や、違法主義者というものは、その置かれている歴史的状況は異なるとはいえ偉大な意味をもっていると考えることができる。なぜなら、健全な個人主義にも、没頭的な逸脱行為（deviancy）にも、完全性を回復したいという義憤（indignation）が含まれているからだ。そして、その義憤なくしては、心理社会的な発達は必ずや破滅してしまうであろう。」^(注26)

極めて一部の青年は革命家的方向に進むけれども、大部分の青年は、以上に述べた理由で、もとの社会の規範の中に戻ってくる。青年が社会とのより新しい包括的な同一視を発展させ、自分を創造的な単位として自覚させるに至る基礎を確立させることが出来なければ、青年のアイデンティティは拡散（diffusion）または混乱（confusion）し（エリクソンは拡散の意味が「おだやかな混乱」と「悪化した混乱」の両方を含むと^(注27)のべている）、成人は青年に極めて部分的なアイデンティティを押しつけることになる。アイデンティティ拡散の人間という、いかにも目標を失ってしまっている人間という印象を与えるが、現象的には、文字どおり何も持っていない人間という場合もあるし、非常に優等生ということもありうる。また、神経症であるとか、道化役者であるとか、一種の発狂状態の場合もある。いずれにせよ、既に繰り返し記したように、青年は、ネガティブなアイデンティティを突き抜けて、本当のアイデンティティを確立するのだから、現象形態だけで青年を判断することは誤っていることになる。

以上で青年のアイデンティティが確立される7つの次元を見てきたわけではあるが、最終段階で青年によって獲得されるフィロソフィー、イデオロギー、宗教が青年に何を提供する機能を持つかという、それは、各次元で確立されたアイデンティティによって与えられる次の諸項目ということになる。^(注28)若干難解な記述であるが次に引用する。

- (1) 見越しうる時間すべてを包含し、そうすることによって個人の「時間混乱」を中和するような、未来に関する単純化された視座（第一の次元）
- (2) 善と悪の理想像からなる内的世界と、具体的な目標と危険とをもった社会的世界との間の、強く意識された照応関係（第二の次元）
- (3) 個人のアイデンティティの意識（過剰）を打ち消すような画一的な容貌と行動とを顕示する機会（第三の次元）
- (4) 抑制感と人格的罪意識とを克服するのに役立つような役割と技術との集成的実験への刺激（第四の次元）
- (5) 既存の技術世界の精神と、是認され規制された競争世界への導入（第五の次元）
- (6) 青年の発育中のアイデンティティの照準枠組としての地理的・歴史的世界像（第六の次元）
- (7) 納得的な原則体系と両立しうる性的生活様式の基礎（第七の次元）
- (8) 超人間的人物もしくは「兄貴」として、愛憎入り混った親子関係を超越した指導者への服従

青年期は前述のように極めてクリティカルな時期である。それは、青年が以上の諸項目を達成せねばならないからであり、いわば自己を発見すること、自分を失うことの危機が、隣り合わせになっている時期だからであるという。そしてこのような特徴を持つ時期は、人生周期（Life Cycle）のうちで青年期において他にないとエリクソンはみている。

〔注〕

- (注1) エリクソンは、青年期についての発達段階表で各モードの特徴を全て記している。だから、青年期については表は完成していることになる。
- (注2) 前掲『自我同一性』p.190 (Identity and the Life Cycle p.144)
- (注3) 同書 p.114, 166, 214 参照
- (注4) R. I. エバンス、岡堂哲雄・中園正身訳『エリクソンとの対話—アイデンティティの探究』金沢文庫 1973, p.50
- (注5) 同書 p.149
- (注6) 笠原嘉著『青年期』中央公論社 1977, p.114-115 笠原によれば、臨床心理学者村瀬孝雄(現立教大助教授)などは、効率的に生活している健康な青年に焦点をあてた追跡研究を実施し、青年期を疾風怒濤と見る危機学説と対照的な立場から青年を研究している。なお最近の青年心理学の動向については笠原が朝日新聞紙上(1977年1月11日付)で「変貌する現代青年心理学」と題してまとめている。
- (注7) 前掲『自我同一性』p.153
- (注8) 同書 p.134
- (注9) 同書 p.146
- (注10) 前掲『主体性—青年と危機』p.353 (Identity—Youth and Crisis p.249)
- (注11) 発達段階表(p.17)参照
- (注12) 前掲『アイデンティティ—青年と危機』p.250 (Identity—Youth and Crisis p.181)
- (注13) 時間展望への失敗は、青年に運命論的絶望感を与えることをエリクソンは指摘する。
- (注14) 前掲『自我同一性』p.156
- (注15) 同書 p.184
- (注16) 同書 p.154
- (注17) 同書 p.191
- (注18) 同書、同頁
- (注19) 同書 p.205

E. H. Erikson の自我同一性 (Ego Identity) についての一考察

- (注20) 前掲『アイデンティティ—青年と危機』p.257 (Identity—Youth and Crisis p.186)
- (注21) 同書 p.166、ならびに、栗原彬訳『青年—その忠誠と多様性』p.96 (E. H. エリクソン、栗原彬監訳『自我の冒険』金沢文庫 1973 所収)
- (注22) 前掲『アイデンティティ—青年と危機』p.166
- (注23) 前掲『アイデンティティ—青年と危機』p.259
- (注24) 同書 p.185 (Identity and the Life Cycle p.233) エリクソンの用いる叡知 (wisdom) は、円熟した「ウイット」から、知識の蓄積、成熟した判断力、総括的な理解力に至るまでのさまざまな意味を含んでいる。
- (注25) 前掲『アイデンティティ—青年と危機』のp.175では、エリクソンは、青年期とは社会的進化過程における更新装置 (vital regeneration in the process of social evolution) であると述べている。(Identity—Youth and Crisis p.134)
- (注26) 同書 p.353 参照 (Identity—Youth and Crisis p.248)
- (注27) 同書 p.297
- (注28) 同書 p.260 (Identity—Youth and Crisis pp.187-188)
- (1) a simplified perspective of the future which encompasses all foreseeable time and thus counteracts individual "time confusion"; (2) some strongly felt correspondence between the inner world of ideals and evils and the social world with its goals and dangers; (3) an opportunity for exhibiting some uniformity of appearance and behavior counteracting individual identity-consciousness; (4) inducement to a collective experimentation with roles and techniques which help overcome a sense of inhibition and personal guilt; (5) introduction into the ethos of the prevailing technology and thus into sanctioned and regulated competition; (6) a geographic-historical world image as a framework for the young individual's budding identity; (7) rational for a sexual way of life compatible with a convincing system of principles; and (8) submission to leaders who as superhuman figures or "big brothers" are above the ambivalence of the parent-child relation.

7. 青年期以降の各発達段階における自我同一性 確立の諸相

1) 第六段階 初期成人期 (young adult)

フロイトの初期成人期 (young adult) にあたる。この時期の最大の問題は結婚ということになる。しかしそこには、非常に大きな危険があるとエリクソンはいう。それは、結婚ということは生物学的にみて人生における本質部分であるが、男性と女性は相補的であるため、男女双方が、それぞれユニークな独自の本質をもって相対せねばならないという事情による。つまり、男性も女性も男女の近親相姦的な同一性 (incestuous identity) を避けなければならない時期であり、双方にはそれぞれのアイデンティティ (自分の性に対する性的同一性, sexual identity) が確立されていなければならないことになる。ここに至って、自我同一性 (ego identity) というものは、本当の完成期に達するのだといわれる。人間は、青年期において、親の世代を乗り越えて伝統的な権威を克服していくわけであるが、結婚ということによって親密な同伴者を獲得し、自分自身すらをも越えていかねばならない。^(注1) これに成功すれば両性間のトラストの実現、異性との親密さ (intimacy) が生じ、失敗すれば孤立 (isolation) という逆の方向への発達が生じる危険があるとエリクソンはいう。

[注]

(注1) エリクソンは「本当に二人になること (true twoness) の条件は、一人一人がまず自分自身にならなければならないことにあるという事実に対する賢明な洞察の獲得こそ、その解答である」とのべている。(前掲『自我同一性』p. 120) また、異性との真の「親密さ」(intimacy) が可能になるのは、適切な同一性の感覚 (reasonable sense of identity) が確立した後だけであることをのべている。(同書 p. 119)

2) 第七段階 成人期 (adulthood)

フロイトの成人期 (adulthood) にあたる。初期成人期 (young adult) の時代における相互的な信頼 (trust) と親密さ (intimacy) が家庭をつくる基礎となり、次の人生周期の準備をする。当然健全な家庭には、通常、次の世代が生まだされていくが、子供が生まれる時代になると、生殖性対自己吸収 (generativity 対 self-absorption) という危機 (crisis) が生じるという。ここで generativity という用語についてのべれば、まず当然、生物学的な意味の生殖性ということの意味するが、エリクソンにおいては、それと同時に、^(注1)「精神的」な意味を持ち、利他的な活動への関心や、次の世代の確立と指導に対する興味と関心をも意味する。だから、エリクソンにおいては、自ら蓄積したような徳 (virtue) および叡知 (wisdom) を授けるという過程に generativity という用語をあてている。だから、子供に対して知恵を伝えると同じように、社会に対しても自分の蓄積したものを伝えていくことが成人の健全な在り方なのだということになる。成人期の人間はまさに、子供への愛情と仕事や思想への愛着の複合体ということになる。このことに失敗したときには成人期に確立されるべきアイデンティティは拡散し、自己吸収 (self-absorption) つまり、自分自身の自我に隠れてしまって、周囲の社会とは交渉を断ち、非常に利己的な個人主義的な性格を持つことになる。倫理的な観点からも、エリクソンは、成人というものは、自己の責任において、次の世代に対してより高い信頼 (trust) をつくりあげる責任があるという。そのことが種としての人間に始めから備わっているのだという。^(注2) 人間は自分の完成だけではもの足りないわけであって、自分の完成したものを社会的遺産として次の世代に伝え、それによって人類の長い Life Cycle の中に新しい貢献をもたらす契機にならねばならないとするエリクソンの倫理観は、個人としての完成が、即ち、人類の歴史的完成への道につながらねばならないという確信に立ったもので、生物学的、心理学的、^(注3) 社会学的真実性をもったものとして提示されている。

〔注〕

(注1) 前掲『自我同一性』p.122

(注2) 同書 p.123

(注3) 同書 p.124

3) 第八段階 成熟期 (mature age)

老年期に入ると、人は自分の人生周期 (Life Cycle) のより完全な見透し (過去と将来の) を得る事ができるという。自分はいったい何であったのか、何を果したのか、何を果せなかったのか、というようなことの完全な見透しを持てるに至った人は、統合の感覚 (sense of integrity) の獲得に成功し、そうでない人は、絶望 (despair) という危機 (crisis) に直面することになる。人は、自分がこれがかつて望み、それに従って現在こういうことを完成し、その意味で現在こういう充足感を持つに至ったというような確信が出来れば、その人は統合の感覚というアイデンティティの確立に成功したことになるし、自分の人生が空虚で無駄だったという絶望的感覚 (sense of despair) を持つに至れば、その人は最終的には、アイデンティティの確立に失敗したということになる。統合の感覚が持てる人は、他者における統合の感覚の確立に寄与でき、人類社会全般の信頼 (trust) の確立に貢献することができる。だから、エリクソンのいう「trust」は個人的な意味での信頼 (trust) も、相互的な意味での信頼 (trust) も、あるいは更に広い社会的歴史的な意味の信頼 (trust) をも意味する。これらのすべての意味を含んだところの「trust」の完成が、エリクソンにおいては人生の終局目標としてとらえられている。そういう意味では、エリクソンは、アメリカインディアンの研究において、trust と mistrust が文化相対的なものとして扱われているにもかかわらず、最終的には trust が絶対的価値を持つというような哲学的方向へと結論が傾いているようにも思える。この点をエリクソンはどのように調和したのかは不明であるが、事実、エリクソン自身、『自我同一性』(Identity and the Life Cycle) の第二部「健全なパース

ナリティの成長と危機」の結語で、「私は心理学を倫理学から区別する境界をふみこえるところまで来てしまった。^(注1)」とのべていることからみて、多分に倫理的色彩の強いものになってきていることは確かである。けれども、このような傾向へたどりついていることは、とりもなおさず、人間としての最高の感覚である trust の感覚が、次の世代の trust の感覚を高めるという意味で、人生周期についての循環的構造の把握が完成されていることを意味するのかもしれない。

最後に、エリクソンにおける「死」についての考え方を取りあげてみたい。一般に、人々が死について語る時、それは生物学的な意味での死を語る人が多い。つまり、自分の肉体が無くなること、苦痛に耐えられぬことの恐れを死の恐怖として語る。ところが、エリクソンに言わせれば、死の恐怖の本質はそういうものではないという。エリクソンは、「死」の本当の恐怖とは自分の個人的な使命が充足されなかったという意味で、自分は人類社会に貢献できなかったという「絶望の感覚 (sense of despair)」こそ、実は死の恐怖の本質だという。だからこそ、人は個人の Life Cycle を越えるような人生哲学 (philosophy of Life) や叡知 (wisdom) を獲得することが最大の目標であって、この最大の目標が獲得されるとき、人はもはや何もものをも恐れず、自分の運命に直面する勇氣を持つようになり、死の恐怖は克服されるのだとエリクソンはいう。^(注2)

〔注〕

(注1) 前掲『自我同一性』p.22 (Identity and the Life Cycle p.97)

(注2) 前掲『アイデンティティ—青年と危機』pp.185-186 で、エリクソンは、次の記述をもって結論づけている。「究極的な関心が諸個人をどのような深淵に引き連れてこようと、心理社会的な被造物としての人間は、人生の終着点に近づくと、新たなアイデンティティの危機に直面するものである。それは、次のような言葉で表現できるであろう。

「わたしとは、わたしの死後にも生きのびるものことである。」

8. 結 語

エリクソンのアイデンティティ概念は、多くの研究者が指摘するように、日本語の良い訳を見つけるのに大変苦勞するような微妙な内容を含んでいる。一般には、この言葉は、主体性とか、存在証明とかいうようにも訳されていて、個人の内的な世界において、根源的な自分というものと、自分についての意識というものが、互に遊離したものでないという持続した一致感をさすものとされている。エリクソンが言おうとしている一致感は、決して一人よがりの主観的な自己確認といった類のものではなくて、自分が現に属するところの文化的歴史的共同体がもつ価値観との深い合致感を伴った自己確認を意味している。そして、この視点は、フロイト派の重鎮であるエリクソンが、フロイトを越える人物として評価される理由でもあるとされている。このことを考えると、アイデンティティという言葉に、実存主義思想において subjectivity の訳語として用いられている「主体性」という言葉をあてると、エリクソンの文脈における identity の意味が十分に言い尽されないのではないと思われる。個人的な同一性の意識的感覚から個人的な性格の連続性を求める無意識的な志向にわたり、さらに特定の集団の理想と同一性との内的一致(連帯感)の側面までを包む極めて包括的な概念である identity の意味は、恐らく、エリクソンが試みた伝記研究と臨床経験のケーススタディをたどっていくことによってしか正確なニュアンスをつかむことができない。エリクソンは人間の発達成熟というものを宇宙のスケールで見ている。親の保護を受けねばならない受動的な存在として生まれ、少年期、青年期を経るにつれて自分自身との共感と同時に、他者との共感が確立され、他者の意味が全人類、全宇宙をも意味するに至り、逆に全人類の同一性 (all-human identity) とか、普遍的同一性 (universal identity) を獲得した人間は、真の意味で次の世代の発展を願うようになっていくという永久に循環するサイクルの分析の視点には、永劫回帰の思想すら感じられる。要する

にエリクソンは、人間が幼少時より老年に至るまでの各時期に、同一性の危機というものを絶えず乗り越えて、高尚な道徳的生活をなすに至る過程を我々に示しているものであり、まさに道徳性の個体発生論的進化論と言っても過言ではない。この点は、人間の道徳性に関する科学的研究を内容にもつところのモラロジー研究との一つの接点となるであろう。なぜなら、エリクソンの視点は、高次の道徳性を獲得しうる資質が所与のものとして人間に与えられ、環境との出会いによってそれが開花していく可能性を、人間の生きた生活史を通じて闡明しようとするものだからである。

(参考資料) D. ラパポートによるエリクソン理論の紹介の要約

D. ラパポート (David Rapaport) は、エリクソンの『Identity and the Life Cycle』の巻頭文として「精神分析的自我心理学の歴史的展望」(A Historical Survey of Psychoanalytic Ego Psychology) を執筆しているが、この論文は、自我心理学 (ego-psychology) の発達の四段階を概括し、フロイトの精神分析以前の理論の特徴、精神分析学の発展期、フロイトの自我心理学の発展、そして、アンナ・フロイト (Anna Freud)、ハルトマン (Hartman)、クリス (Kris) を経てエリクソンの独特の理論が成立するまでの跡づけを簡略に概説している。またこの論文の内容は、現在邦訳されているエリクソンの著書の解題において、エリクソンの位置付けを示すのにしばしば用いられているものである。その意味でここに、エリクソンの理論についての評価と位置付けの部分を参考資料として付け加えることにした。ラパポートは、エリクソンの理論の特徴を八つにまとめているので、その順に従って内容を平易に書き下した。なお、重要な語句は原文を付した。

〔エリクソンの理論の特色〕

1. エリクソンは人間の心理・社会的発達 (psycho-social development)

の各段階の継起 (sequence of phase) を概観して、これらの各発達段階を心理・性的な漸成的発達 (psycho-sexual epigenesis) に関連付けることによって自我の漸成的発達 (ego-epigenesis) を明らかにしようとし^(注1)た。これによってエリクソンは、フロイトが不安の発達について概念付け^(注2)た事柄を一般化し、また、ハルトマンの自律的自我発達 (autonomous ego development)^(注3) の概念付けを特殊化しようと試みた。

[注]

(注1) フロイトの発達理論は、人間の生物学的な発達を根幹としており、フロム^(注1)の発達理論は、社会的な相互交渉様式の発達に重きを置いている。この点では、エリクソンは、この両者の発達の間には必然的な対応関係が存在するという前提に立っている。

(注2) ラバポートによれば、完成したフロイディズムにおいては、不安の源泉はパーソナリティ内部のアンバランスに基づくものと考えられ、イド (id) が強大化して衝動が暴走を始める場合や、超自我 (super ego) の禁止命令が一方的に強大となり、パーソナリティのバランスを乱す場合にも生じる。この不安の危機の予知が防衛をもたらすというのがフロイディズムの不安と防衛の関係の定式化である。ネオフロイディズムにおいては、不安の源泉を文化状況、社会状況との関連でも検討する。(詳細はラバポート論文 p.10 参照)

(注3) ハルトマンは、フロイトの自我の概念のあいまいさを整理し、防衛機制の主体としての自我 (defensive ego) と区別される自律的自我 (autonomous ego) の概念を提唱した。この自律的自我の機能は、知覚、記憶、思考、言語、運動性などとされている。(前掲『精神医学辞典』 p.226, p.233, および、ラバポート論文 p.12)

2. エリクソンの心理・社会的発達の各段階の継起は、リビドー (libido) の発達と並行し、さらにそれを越えて、人生周期 (ライフサイクル) 全体 (the whole life cycle) に及んで^(注1)いる。心理・社会的発達の概念を導入した^(注1)ということで、彼は、精神分析理論が、従来、性器的な成熟 (genital

maturity) という唯一つの概念の下に発達段階を考えていたものを、ライフサイクルの各段階を包括的に研究する手段 (tools) を提供した。

[注]

(注1) フロイトのいうリビドーの発達とは、だいたい5才ぐらいまでの幼児期性欲が頂点である。成人期にはリビドーの成熟段階は終りということになるので、エリクソンが、幼児期、成人期のみでなく、人間の一生にわたる発達理論を展開していることは、彼の理論が心理学の理論としては巨大なものであることになる。

3. ライフサイクルの各段階は、その段階で解決されねばならないところの各段階特有の発達課題 (phase specific developmental task) によって特徴づけられるが、その解決の方法は、すでに過去の段階 (previous phase) で準備され、それに引続く各段階で仕上げされるか、あるいは、逆の方向の結果が生じるものとされる。したがって各段階とも、その発達課題は、成功的な解決と不成功的な解決の両極端の言葉 (extremes of successful and unsuccessful solutions) で記されている。ただし実際には、多くはこの両極端の中間に均衡を得たような結果が得られる。(ラバポート論文 p.14)

4. エリクソンの適応に関する基本的な仮説は、平均的に期待される環境 (average expectable environment) に対応するところの生得的な調整機制である。そして、「相互性」 (mutuality) という概念は、発達途上の個体と、人間的 (社会的) 環境 (human environment) の間の調整機制を意味している。このことをかみ砕いて言えば、人々は皆平均的に期待される環境条件を持っていて、よほど特異な例外が無い限り、各子供の持っている条件、各子供の生まれてくる環境条件は平均的に一定で、人間は平均的環境に生得的に対応できるような体制と機構を持っている。そういうことにより、環境と生体の適合性が起こり、円満な発達、適切な発達が

保障されていると考える。その意味で、エリクソンは相互規制 (mutual regulation) ということを強調する。通常我々は、育児において、母親が一方的に、子供を規制して、躰の型にはめていると考えるけれども、それは誤っていて、母親といえども子供との関係は相互的なものであり、母親が一方的に乳児を左右するわけではなく、乳児がとる反応様式というものも、母親の行動を規制してくるという生得的な相互規制という過程であり、このことによって子供の発達には保障されるのだということになる。母子の関係については種々の研究があるが、相互規制を強調している点はエリクソンのユニークな特徴である。丁度、二つのあらかじめ決められた歯車がかみあうように (原文では「各ライフサイクル相互間の歯車のかみ合わせ (a cogwheeling of the life cycle) を仮定している」となっている)、社会の代表者 (representatives of society, 通常乳児にとっては母親) の特有な生得的反応性 (specific inborn responsiveness) と、彼等自身の発達段階特有の欲求、つまり、子供づくりの欲求 (generativity) と、各個体 (乳児) の欲求がうまくかみ合って、それが個体 (乳児) の発達を保障するということになる。(ラポポート論文 p.14)

5. エリクソンの理論は、対象関係 (object relations) の自我の側面と社会の側面とを扱っている。エリクソンによれば、養育者たちは、その社会の代表者、そしてまた、制度伝統に由来する養育パターン (caretaking patterns) の担い手であり、各社会は、発達途上の各個体はその社会の中で生きていくことを確実なものにするような、その社会特有の諸制度 (親の養育、学校、教師、職業など) によって規定されたその社会成員それぞれの各発達段階に出会う。(each society meets each phase of the development of its members by institutions (parental care, schools, teachers, occupations etc.) specific to it, to ensure that the developing individual will be viable in it.) さらにまた、エリクソンの理論によれば、漸成的な発達各段階の継起 (順序) は普遍的 (universal)

なものであるが、各段階それぞれに特有な定型的な解決の仕方は、社会ごとに異なる。(ラポポート論文 p.15 参照。前掲『エリクソンとの対話—アイデンティティの探究』p. 161)

6. エリクソンの自我発達の心理社会的理論では、いわゆる文化学派 (たとえば E. Fromm や K. Horney) が仮定しているように、個人は本質的に社会的なのではなく、躰によって社会的規範を附加していくのだとは考えられていない。彼は、各個体とその漸成的発達の各段階に即して社会環境と出会う (encounter) 過程で、人間の各個体が発達上備えている社会的性格をどう展開してゆくかを跡づけている。このようにして、本来は非社会的な個体に、「躰」(disciplines) や「社会化」(socialization) が課せられることによって社会的規範 (social norms) が附加されるのだといった仮定は否定された。エリクソンが、人間は生得的に社会性を持っている (genetically social character of the human individual) というのはこのためである。そして個体を社会成員たらしめるのは、むしろ、その漸成的発達各段階ごとに社会から課せられる課題 (task) を、個体がどのように解決するかという解決の仕方に影響を与えることによってであるという仮説がエリクソンによって立てられた。(ラポポート論文 p. 15 参照)

7. エリクソンは器官様式 (organ mode) とその様式の漸成的発達 (mode epigenesis) という概念を導入し、それによって、その段階に特有な発達上の課題 (phase specific developmental task) に社会が影響する重要な機構 (mechanism) について詳述している。この概念はハルトマンが用いた「機能の変化 (change of function)」という概念の特殊例である。各発達段階に特有な様式、たとえば、発動的 (inceptive)、貯留的 (retentive)、侵入的 (intrusive) などの様式は、その本来の起源となった器官や区域から別な器官 (organ) や区域 (zone) へと汎化 (gen-

eralize) され置き換えられ (displaced), このようにしてこれらの様式は、本来の源泉から「かけ離れたもの」となり、その結果、自律的 (autonomous) なものとなる。すなわち、二次的自律性 (secondary autonomy) をもつようになる。エリクソンは社会の養育制度によって影響されるのはこれらの様式の機能の変化であることを明らかにしている。そしてこの結果、特定の社会の中に生きているところの、受けとる (receiving), 獲得する (taking), 与える (giving), 出かける (letting go), 作る (making) などの各行動の仕方 (behavior modalities) に対応する器官様式 (organ mode) は機能の変化をこうむり、二次的自律性をもった自我装置 (ego apparatuses of secondary behavior modalities of the individual) になるというのである。(ラバポート論文, p. 15 参照)

8. エリクソンの理論は、フロイトの理論と同様に、現象的なもの、とりわけ臨床的な精神分析の命題から、より一般的な精神分析的心理学の命題にわたっているが、その相互の系統的な区別がなされていない。また、理論上の用語の概念上の位置付けがあまりにも不明瞭である。(なお、ラバポートは、この課題は、今後の自我心理学そのものの課題であるとしている。) (ラバポート論文, p. 16 参照)

以上でラバポートによるエリクソン理論の特徴の要約を終るが、ラバポートは、全体として、エリクソンの説は極めて巨大なスケールを持っているが、まだ不明確な所が多く、フロイト、ハルトマン、エリクソンの理論を統合することが今後の課題であると評している。

あ と が き

本論は、先にモラロジー研究所研究部の研究ノート (No. 113) に発表した論文に若干の修正を加えたものである。本論の冒頭で述べたように、アイデンティティという概念は、非常に広い範囲で用いられるようになってきており、最近では、アイデンティティを操作的に定義したものをを用いて、青年期の人格特性を実証的に捉えようとする研究や、他の類似概念との比較も盛んである。元来、この概念は精神分析学的文脈から出たものであるが、精神分析学的方法そのものにも多くの問題がある。私が日頃考えていることは、現在、人間科学という名のもとに人間全体を科学的に捉えていこうという気運は大いに熟してはいるけれども、方法論的にはいろんな問題があるのではないかということである。つまり、操作的に部分的変化をつくりだすことの不可能な人文現象においては、厳密な意味での実証は不可能であるし、了解的方法も、とかく技法的示唆を欠いたものになる危険を持っているということである。私の恩師でもある慶応大学教授齋藤幸一郎先生は、しばしば、精神分析学的方法には限界があることを指摘された。そして、本論に対する感想の中で、エリクソンのいうアイデンティティとは、一般に人間が成熟していくにつれ充実していくと考えられる意識における内的整合性をさしていると考えられるので、臨床的根拠をより確実なものとし、実証的研究によって裏打ちされていかねばならないことを述べられた。大いに考慮すべき点であると思われる。青年心理学は、まだ、アイデンティティの研究方法を模索している段階であり、「実証」と「了解」の双方を統合した方法を捜し求めている。このような事情を念頭に置きながら、私としては、ともかくも、経験豊かな臨床家により洞察 (あるいは了解) された仮説というものが、人間を捉える一つの視点と枠組を提供してくれるという点で十分に尊重していきたい。特に、パーソナリティというものは、非常に長い時間をかけて形成されるものであり、人間の生涯全体を巨視的に見なければ捉えきれない側面を持

っている。エリクソンの考え方も、このような類に入るものと思われる。結局、人間とは、一筋縄では捉えきれない複雑な成熟過程と多面的な相をもつ存在であるということなのかもしれない。研究部顧問京都大学名誉教授下程勇吉先生は、エリクソンについての研究を含めて、人間研究に対する基本的態度について常々有益な示唆を与えて下さった。また、慶応大学名誉教授西谷謙堂先生は、研究ノートの段階で細部についてのご意見をお寄せ下さった。そして、研究部教育研究室室長、麗沢大学助教授細川幹夫先生には、本論作成の全般についていろいろご助言をいただいた。これらの先生方に誌面で失礼ではありますが深甚の謝意を表します。